

九州大学 経済学部 同窓会報

第56号

九州大学経済学部同窓会
事務局 〒812-8581
福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学経済学部内
TEL 092-642-2442 FAX 092-642-2348
mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替 01750-6-21743

目次

Contents

平成26年度行事予定(総会のご案内) / 1

研究院長挨拶

山本 健児 / 2

事務局長挨拶

藤井 美男 / 4

支部だより

東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 5

関西支部 副支部長 久保 隆二(昭和49年卒) / 6

福岡支部 事務局長 平井 彰(昭和55年卒) / 6

大分県支部 支部長 高山泰四郎(昭和39年卒) / 7

特別寄稿

九州大学経済学部の兄貴 都留大治郎

秀村 選三(昭和22年卒) / 8

同窓生健筆模様

正田誠一さんを偲ぶ一帋辞

故 都留大治郎(昭和17年卒) / 12

九大特別研究生の時代

故 奥田 八二(昭和19年卒) / 14

リレー随想

「とおでしんどう……」

原田 準一(昭和26年卒) / 18

九経43E11クラス会と学生生活の思い出

橋本 寛(昭和47年卒) / 19

懐かしき田島寮の思い出

中原 敏詔(昭和50年卒) / 21

九州大学経済学部同窓会略年表^⑬ 2013(平成25)年 / 25

同窓会会則 / 26

同窓会歴代会長 / 28

同窓会費納入のお願い / 28

平成26年度行事予定(総会のご案内)

平成26年度の全国・各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内いたします。

平成26年度 全国・福岡支部合同総会

日時 平成26年6月6日(金) 18時～

場所 ハイアットリージェンシー福岡

(福岡市博多区博多駅東2-14-1)

TEL (092) 412-1234

<お問い合わせ先> 福岡支部事務局 平井 彰

(一社)九州経済連合会内

TEL (092) 761-4261

E-mail hirai@kyukeiren.or.jp

平成26年度 東京支部総会

日時 平成26年7月7日(月) 18時～20時50分

場所 学士会館 210号室

(東京都千代田区神田錦町3-28)

TEL (03) 3292-5936

<お問い合わせ先> 東京支部事務局 吉元 利行

株式会社オリエン特総合研究所

TEL (03) 5877-5590 (ダイヤルイン)

FAX (03) 5877-5859

E-mail toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp(会社)

t29yoshimoto@aol.com(自宅)

平成26年度広島地区九大法・経同窓会総会

日時 平成26年11月開催予定

場所 未定

平成27年関西支部総会

日時 平成27年2月21日(土) 15時～

場所 大阪弥生会館(予定)

(大阪市北区芝田2-4-53)

TEL (06) 6373-1841

<お問い合わせ先> 関西支部事務局 中野 光男

富士精版印刷株式会社管理本部 気付

TEL (06) 6394-1182

E-mail m-nakano@fujiseihan.co.jp

研究院長挨拶

大学が果たすべき人材育成を考える

経済学研究院長
山本 健児氏

このところ、「グローバル人材」という言葉がマスメディアに頻出する。試みに、日本経済新聞社の記事データベース「日経テレコン」を用いて、

日本経済新聞に「グローバル人材」という語句が用いられている記事が何件現れたかを検索してみた。結果は、2005年から2009年まで漸増したが各年とも数件に留まったのに対して、2010年に35件、2011年に71件、2012年に181件、2013年に173件となった。2014年の最初の2カ月間は18件だったので、2012年をピークとして漸減しつつあることが予想される。

なぜ「グローバル人材」関連の記事が2011年から2012年にかけて急増したのだろうか。それは、民主党政権のもとで2011年5月に「グローバル人材育成推進会議」が設置され、同年8月にそのための政策全体像に関する閣議決定がなされたからである。2012年4月には「グローバル人材育成推進事業」の公募が、日本全国の国公立大学に対してなされた。その内容の詳細については割愛するが、他大学への波及効果を期待する全学推進型には41大学が応募して11大学が採択された。大学内他部局への波及効果を期待する特色型には111大学（部局）が応募し、31大学（部局）が採択された。

旧帝国大学で全学推進型に採択されたのは北大と東北大学である。特色型で採択され、これに経済学部が関わっているのは一橋大学、神戸大学、長崎大学である。一橋大学は商学部と経済学部とのジョイント申請であるのに対して、神戸大学は国際文化学部が主幹学部となり、経済学部と経営学部は協力学部という位置づけである。長崎大学経済学部は国際ビジネスコースを新設する一方で、この4月に発足する多文化社会学部に経済学部の学生定員の約25%が移管された。九州大学からは特色型に農学部が採択された。

文部科学省や日本学術振興会は、教育計画や研究

計画を公募し、応募の中から特色があり成果が高い確率で期待されるものを選出すべく、審査委員会に審査を付託するのが一般的である。審査委員は、単にアイデアがよいというだけでなく、そのアイデアを活かす実績がすでに積み重ねられている応募案に高い評価を与えるものである。当然、組織としての取組みがなされてきたかが評価対象となる。

九州大学経済学部は、残念ながら応募できなかった。しかし、「グローバル人材」育成の組織としての試みが蓄積されていなかったというわけでは必ずしもない。例えば、川波前研究院長の時代に、社会科学分野における中国最高峰の大学の一つという評価が高い中国人民大学経済学院との修士課程院生のダブルデグリー協定を結び、実績を挙げていたからである。ただしその実績は、もっぱら入超であり、中国語を駆使して中国人民大学で学ぼうという日本人学生はこれまで一人しか現れていない。

九州大学経済学部学生が、外国の大学に留学しないというわけではない。九州大学は諸外国の著名大学と大学間交流協定や部局間交流協定をたくさん締結しており、その数は前者だけで120を超える。そして、経済学部学生で交換留学協定に基づいて留学している者は、2008年度の12人から、25人、34人、53人と年を追って増えてきた。2012年度は微減して49人であった。在籍学生数に対する比率でみると、文学部の7～8%台には及ばないが、4%台に上っており、これは他学部と比較して若干高い。

このような表面的な数値や制度的枠組みはさておき、大学教育に問われるべきは、どのような人材をどのような方法で育てるのか、ということであろう。九州大学経済学部は、「経済学の基礎的学識と幅広い教養とともに、社会性と国際性を身につけることにより、様々な分野の指導的立場で活躍できる人材を養成することを目的として」いることは、2013年後半から2014年初めにかけて文部科学省との対話でなされた「ミッションの再定義」においても再確認されている。いうまでもなく、ここでいう様々な分野とは実業界、公務の世界、学界などであり、各界を構成する多様な組織である。もちろん、各界の中には消費者団体や労働団体などのNPO界や政界も含まれうる。

どのような世界であろうと、指導的立場に立つためには、その各世界の専門性を身につけるとともに、まさしく幅広い教養、社会性、国際性も身につける必要があるし、九州大学教育憲章にいう人間性も必要である。「グローバル人材」となるためには、国際性を身につけるだけでなく、他の3つの「～性」と幅広くかつ深い教養を身につけた人材であることが望まれる。それを、大学の学部4年間で完成させることができるであろうか？あるいは、学界で活躍したいという希望を持つ若者を、学士課程に加えて修士課程2年間と博士後期課程3年間、合計9年間だけで一人前の研究者に育て上げることができるであろうか？

不可能であると断言はできない。しかし極めて困難である。我々にできるのは、そうした人材へと育ちたいという意欲を引き出し、そうなるための力を徐々に学生自らが身につけるための手助けをすることであろう。そのために学生は、講義において教員が伝授しようとする知識を理解し我が物とする力や、このためにノートを取る力を身につけることが必要であるし、少人数セミナーで自身が調べたことを他者に分かるように提示し、提起される疑問点に答える力、ディスカッションする力を身につけることが必要である。もちろん、調べるに値する課題を自ら発見する力も必要である。

そうした力を身につけるためには、文章を書く力が必要である。文章を書くのは通常、まず一人で行う。その作業は内省を伴う。若者にはコミュニケーション能力が欠けているという批判がいつの時代にも年配者からなされてきた。コミュニケーションとは単なる挨拶や、たわいもない会話のことではない。



自身が内省したこと、考えたことを、他者に理解してもらえるように語る能力であり、他者の語ることを理解する能力であり、それらを踏まえて相互に人間性と社会性を高めあう能力のことである。あるいは、必要とあれば未知の他人と協力関係を作る力である。以上述べた力は一挙に身につくものではない。段階を踏んだ長期にわたる訓練、稽古が必要である。多くのスポーツ競技と同様、大学での人材育成は訓練の積み重ねによるしかない。

「グローバル人材」となるためには、母語のみならず、なんらかの外国語を駆使して、外国人とコミュニケーションできなければならない。そのためには外国語能力こそ重要と考えるのか、それとも他者に語るべき独自のものを持つことこそ重要と考えるのか再考してもよいのではないか。さらに、英語さえ駆使できれば世界のどこでも活躍できるかどうか、これも再考すべきではなかろうか。

天才でなければ個人の能力は限られている。限られた能力でも努力すれば、九大の学生ならば英語に加えてもう1つの外国語をなんとか操る能力を獲得することは可能であろう。そして、世界には実に多様な言語があるので第2外国語は各人によって異なる方がよい。そうすれば集団としての九大経済学部生あるいはその同窓生は、世界の人口の多数を占める多様な非英語世界とのネットワークも形成できる。

「グローバル人材」とは、なんらかのコミュニティや自らが足場を置くいずれかのローカル社会のために、自らの母語とは異なる母語を持つ人々やその社会とコミュニケーションできる人材である。ローカル社会は、近隣地域、市町村、都道府県、例えば九州というスケールの地方ブロック、日本といった重層性を持つことと、個人が帰属意識を持つコミュニティは複数ありうることに注意したい。経済学部同窓会もそうしたコミュニティの一つであり、これへの帰属意識を学生・卒業生が持つようになるためには、経済学部を構成するより基礎的な集団、例えばゼミという共同学習集団をコミュニティへと昇華させることが前提となろう。

そのための指導力を我々教員が持っているか否か、私自身反省すべき点は多々あるが、同僚たちはみな、各自の工夫でその努力をしている。その工夫を我々が相互に学びあうこともまた重要である。

平成26(2014)年度入学式 新入生324名 平成25(2013)年度卒業式 卒業生307名



同窓会事務局長
藤井 美男氏

平成26年4月7日(月)、伊都キャンパスに新築された椎木講堂で平成26(2014)年度入学式が行われた後、箱崎キャンパスで経済学部オリエン

テーションが開催されました。なお社会人中心のビジネススクールの入学式は、一足早い4月5日(土)に、箱崎キャンパスの国際ホールで開催されました。入学者総数は324名で、内訳は経済学部経済・経営学科150名、経済工学科95名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻41名、産業マネジメント専攻(九大ビジネススクール、略称QBS)38名です。9日の経済学部オリエンテーションでは、貫正義福岡支部長にお越しいただき、同窓会の説明と入会案内を行っていただきました。

3月25日(火)には、福岡リーセントホテルで東京・関西・福岡の各支部役員や名誉教授の参加のもと、経済学部卒業生・経済学府修了生の卒業記念祝賀会が開催されました。経済学部卒業生は225名で、うち経済・経営学科142名、経済工学科83名です。経済学府修士課程修了生は82名で、うち経済工学専攻15名、経済システム専攻28名、産業マネジメント専攻39名です。祝賀会では若手研究者への研究支援、学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与も執り行われました。以下が平成25年度の授与者です。

〈修士論文・プロジェクト論文〉

- | | |
|----------------|----------------|
| (1) 経済工学専攻 | 市川 真希 |
| (2) 経済システム専攻 | 齋藤 和平
末永 雄大 |
| (3) 産業マネジメント専攻 | 船橋 健古
長野圭太郎 |

〈成績優秀者〉

- | | |
|-------------|----------------|
| (1) 経済・経営学科 | 松永 直也
箕原 知子 |
| (2) 経済工学科 | 楊 菲 |

前久野国夫前事務局長からバトンタッチして、ほぼ一年が経ちました。何も分からないまま事務局長の任に着き、何とか職務をこなした、というのが実感です。初年度を大過なく務められたのも、各支部の皆様方を始め大勢の方々の御協力の賜と心より感謝しております。

昨年と同様に、この文章は入試前期日程直後に執筆することとなりました。初日の2月25日は快晴で、二日目は少々雨降りでしたが、全体に受験生の皆さんは実力を発揮できたのではないかと想像しています。九州地方では混乱はありませんでしたが、今冬の大雪は東京での入試をも直撃し、中には追試験を実施した大学もあったようです。受験生の災難はもちろんとして、試験を実施する側も想定にない状況で、相当な苦労があったことかと推察します。

かつて、国立大学が一期校・二期校と分かれており、前者が3月の始め、後者が3月の後半に入試を実施していたことが思い起こされます。九州大学は3月3～5日の三日間というのが決まった日程でした。ワープロもコンピュータも、携帯電話もない時代に、試験を実施して採点(数百枚の答案を見ることとなります)をし、その結果を整理して、合格者を3月の半ば頃までに決定するという作業がいかに大変だったことか、想像もできません。実は昨今の大学では、学部だけでなく大学院のものなどを含めたくさんの入試をしており、極端に言えば一年中入試業務に携わっているような実情があります。従って、コンピュータを利用することで業務が軽減される、という単純な話にもなりません。まさに入試とは、昔も今も「受験する側も、受験させる側も大変」なものなのです。

上段の報告文中にあるように、今年の春から卒業式と入学式が伊都キャンパスに新築された椎木講堂で行なわれます。今後大学全体の行事はこの講堂が使用されます。ただ、経済学部・学府が伊都キャンパスへ移転するまでは、一人一人への学位記授与は従来通り箱崎キャンパスで行ないますので、同窓会主催の卒業祝賀会もしばらくはリーセントホテルが会場となります。そのため伊都から箱崎への卒業生の移動が大変で、私共も悩みましたが、貸し切りバスの利用、祝賀会開始時刻の変更で何とか例年通り

とすることができました。伊都キャンパスへの移転後はどうするのか全く未知数で、頭の痛い問題ではあります。

もう一つ頭の痛い問題は、新入生の会費納入です。今年も新入生への説明会などに際して、同窓会活動の説明と同窓会への加入の勧誘を行う予定で、納入率を少しでも高める工夫をしていきたいと考えています。2013年6月に開催された東京支部総会では、

私の想像をはるかに超えて、多くの若い同窓生（社会人1～2年目）が参加してくれました。そうした様子を新入生や在学生に伝えることで、同窓会の意義を広く示すことができるようにも感じました。今後も池田弘一会長を筆頭に、各支部同窓会の皆様方に一層の御協力をお願いして、新年度の御挨拶いたします。

支部だより

東京支部

1. 理事会の活動状況

平成25年3月12日（水）午後7時から学士会館310号室にて、理事会を開催いたしました。本年度第1回目の理事会を池田支部長ほか今年度理事候補者も含めて15名の参加にて開催しました。

理事会では、昨年7月総会以降の支部活動状況を報告し、本年度7月総会の記念講演他の企画内容について協議しました。

11月の若手理事会で、若手理事を中心に「九大経済若手会」と銘打って、九州大学経済学部卒業生、現役の先生、現役学生を対象に交流会を開催することになり、品川で1月14日、2月28日と2回開催し、それぞれ12名、16名（先生2名、現役2名含む）が参加してくれました。引き続き、4月12日（土）午後3時より、TKP品川カンファレンスセンター ANNEX（港区高輪3-13-1 TAKANAWA COURT内）にて第4回目の「新卒者歓迎会」開催に向けて、協力していくことになっています。

関東方面に就職する卒業生・就職活動中の学生に、先輩から様々な情報を提供するとともに、若手卒業生の交流の場としていきたいと思えます。

2. その他の活動内容

- ①九大東京同窓会理事会（11月20日）出席／神田・梅林
- ②九大法学部東京同窓会（11月21日）参加／学士会館

- ③九大・北大合同フロンティア・セミナー（11月21日）東京ステーションコンファレンス
- ④若手理事会（11月22日）東京駅・龍潭
- ⑤九大経済関西支部総会（2月15日）参加 大阪・弥生会館

3. その他お知らせ

- (1) 東京支部では、平成22年9月より、Twitterを、平成23年秋からFacebookの利用を開始しています。皆様の「いいね！」やコメントなどよろしくお願いします。
- (2) 理事会や同窓会関係行事の様子は、東京支部通信及びFacebookで記事と写真の掲載を行っております。<http://dousou.cocolog-nifty.com/>なお、東京支部の活動状況は、<http://homepage1.nifty.com/dousou/>のトップページwhat's newからも見ることができます。
- (3) 今年の七夕総会は、7月7日（月）午後6時から学士会館にて、総会を開催します。懇親会は、7時15分頃からになります。同窓会報に同封しております申込用紙に氏名等の必要事項をご記入のうえ、事務局宛にファクシミリまたはeメールでお送りください。FBからの申込みもできます。

【東京支部事務局長 吉元利行 1978(昭和53)年卒】



第2回「九大経済若手会2014」

関西支部

2月15日（土）、JR大阪駅近くの大阪弥生会館において、39回目の関西支部総会が行われました。

近年にない大雪の影響のため開催も危ぶまれていましたが、当日は大学や同窓会本部、東京支部、福岡支部、法学部関西支部からのご来賓と会員あわせて約50名にご出席いただきました。



石橋支部長あいさつ

第一部の総会は、谷村信彦理事（平成3年卒）の司会進行で始まり、冒頭、石橋英治支部長（昭和36年卒）がご挨拶。引き続き、中野光男事務局長（昭和50年卒）から行事報告、行事計画案、役員人事案の説明と会計報告が行われ、議案はすべて原案通り承認されました。

その後、山本健児経済学研究院長から学部の再編・新設予定や重点方針など大学の近況、同窓会本部の藤井美男事務局長から会則変更、また大学総務部の市山郁生次長からは今後の行事予定やHPについて、それぞれご報告やご説明がありました。

第二部は、和歌山大学経済学部教授の齊藤久美子氏（昭和58年農学部卒、昭和62年経済学修士課程修了）から『ロシア会計のひととき』というテーマで、ご講演いただきました。その中で、ロシア会計への道に進まれた経緯や旧ソ連邦崩壊後の現地での生活状況などについて、いろいろと興味あるお話をお伺いすることができました。



齊藤先生講演

講演会の後、戦時中の九大の状況を紹介した番組のDVDを放映。これはNHK福岡放送局により制作されたもので、帝国大学最後の卒業生である内田勝敏先輩（昭和22年卒）が番組の中で登場され、当時の大学の状況や学徒出陣などについてお話しされていました。

第二部終了後は会場を変え、進行も清丸泰司事務局長代理（平成2年卒）に変わり、第三部の懇親会が開宴。棚倉亨先輩（昭和27年卒）による開会のご挨拶、ご来賓の紹介の後、池田弘一同窓会長（昭和38年卒）のご発声による乾杯で歓談に移りました。久しぶりの再会で近況報告など、会場のあちらこちら

らで話が弾んでいました。途中、佐野壬彦顧問（昭和38年卒）の指揮のもと、応援歌と学生歌『松原に』を全員で斉唱。会場は大いに盛り上がりました。最後に、昨年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された鈴木多加史顧問（昭和33年卒）による万歳三唱で、盛会裡に懇親会を終えました。

関西支部では、今後、5月17日（土）の見学会（羽曳野市の河内ワイン館）、9月20日（土）のゴルフ会（愛宕原ゴルフ倶楽部予定）、11月15日（土）の勉強会（講師：平成8年卒藤川昇悟氏、会場：大阪弥生会館）などの行事が予定されています。関西におられる同窓会の皆さんの多数のご参加をお待ちしています。

【副支部長 久保 隆二 1974(昭和49)年卒】



池田会長のご発声により乾杯



左から吉元利行（東京支部）、中野光男（関西支部）、平井彰（福岡支部）各支部同窓会事務局長

福岡支部

平成26年度全国・福岡支部合同総会のご案内

福岡支部総会は、2年に一度、全国との合同総会となります。今年も趣向を凝らし総会ならびに懇親パーティーを開催いたしますので、皆様のご参加をお待ちしております。開催要領は以下の通りです。

〈平成26年度全国・福岡支部合同総会ならびに懇親パーティー〉

日時 平成26年6月6日（金）18時～

場所 ハイアットリージェンシー福岡（福岡市博多区博多駅東2-14-1

TEL (092) 412-1234)

特別講演「『軍師官兵衛』と如水庵」福岡支部監事（五十二萬石如水庵社長、昭和45年卒）森恍次郎氏
 <お問い合わせ先>福岡支部事務局 平井 彰
 （一社）九州経済連合会内 TEL (092) 761-4261
 E-mail hirai@kyukeiren.or.jp

サロン会と交流ゴルフ会

福岡支部では、例会として交流ゴルフ会並びにサロン会を開催しております。

〈交流ゴルフ会第55回コンペ〉

平成25年11月30日（土）、筑紫丘ゴルフクラブにて開催。今回は牛房良嗣さん（昭和30年卒、以下同じ）、麻生喜久男さん（35）、井上観光さん（35）、甲斐敏洋さん（41）、貫正義さん（福岡支部長、43）、水上眞眞さん（47）、三縄隆一郎さん（47）、嶋田正明さん（54）、梅原晋さん（59）、秋澤壮一さん（60）の10名が参加され、貫支部長が見事優勝されました。優勝者には毎回支部長杯を贈呈していますが、貫支部長みずから優勝杯を手にとされました。

〈次回（第56回）コンペについて〉

次回の交流ゴルフ会は、6月14日（土）8時31分より、筑紫丘ゴルフクラブにて開催いたします。登録メンバーの方にはご案内をいたしますが、ご参加希望の方は事務局までお問い合わせください。多数のご参加をお待ちしております。

〈サロン会〉

- ① 恒例の忘年会を12月6日（金）、福岡市・剛呑にて開催しました。当日は大学から山本健児研究院長、藤井美男教授（同窓会事務局長）、同窓会事務局の藤原由美子さん、福留久大名誉教授、濱砂敬郎名誉教授、それからOBとして最高齢の原田準一さん（昭和26年卒、以下同じ）、麻生喜久男さん（35）、進谷庸助さん（35）、柴田康之さん（38）、檀豊隆さん（40）、青柳泰教さん（46）、市川順一さん（49）、加藤孝典さん（50）、光富彰さん（福岡支部副支部長、51）、嶋田正明さん（54）、平井彰さん（福岡支部事務局長、55）、森内勇貴さん（平成20年卒）の17名が参加し、皆さんから平成25年を振り返って挨拶の後、名物の馬刺しに舌鼓を打ちつつ懇親を深めました。
- ② 1月例会と恒例の新年会を1月10日（金）、それぞれ福岡市・電気ビル共創館3階九州経済調査協会BIZCOLIと博多魚いち いっ笑において開

催し、18名が参加しました。1月例会は、研究院長に講話をいただくのが慣例で、今回は山本健児研究院長より、「九州大学経済学部における『グローバル人材』育成について考える」のテーマで講話をいただきました。山本先生からは、1.九州大学の中での経済学部学生の外国留学志向の実態、2. 文部科学省の「グローバル人材育成事業」の概要、3. そもそも「グローバル人材」とはどのような人材なのか、4. 具体的にはどのような教育が必要か？について、特に最近、若者の内向き志向が言われますが、九大経済学部の実態はどうか、「グローバル人材」育成の具体的手法はいかにあるべきか、等々示唆に富んだご講話をいただきました。山本研究院長による講話のあとは、近所の居酒屋に場所を変え、最高齢の原田準一さん（昭和26年卒）の乾杯の発声で、新鮮な魚介類に舌鼓を打ちつつ懇親を深めました。

【福岡支部事務局長 平井 彰 1980(昭和55)年卒】

大分県支部

大分県支部第17回総会及び懇親会を、1月31日（金）18時30分から、39名の会員が参加し、大分市のトキハ会館で開催した。

総会では、高山支部長の挨拶の後、議事に移り前年度の経過報告・決算を承認して終了した。

その後、大分県産業科学技術センターのセンター長 中原恵氏（昭和52年農学部卒）による「省エネ・再生エネ技術&デジタルものづくり」と題する講演が行われた。大分県における先端技術の研究、特に3次元プリンタによるものづくりに関する講師のわかりやすい説明に文系出身の会員も熱心に聴講していた。

引き続き懇親会が開催され、貞包副支部長の挨拶・乾杯で参加者の交流が始まった。



25年、24年卒の会員がスピーチや余興を行い、先輩達の大喝采を浴びた。

今回、若い世代や女性会員の参加を促すため交流会費を大幅に引き下げ、さらに先輩会員から個別に勧誘をしたこともあり、平成元年以降卒業の会員が

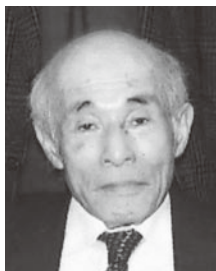
5名、女性会員が2名参加し、高齢化(?)している同窓会の今後の活動に大いに期待を持たせた。

最後に学生歌「松原に」を全員で合唱、21時過ぎに、松浪副支部長の万歳三唱で、再会を期して閉会した。

【大分県支部支部長 高山 泰四郎 1964(昭和39)年卒】

特別寄稿

九州大学経済学部の兄貴 都留大治郎



九州大学名誉教授
秀村 選三氏
1947(昭和22)年卒

宮本又次先生が「都留君は文章が非常にうまい。作家になっていたらよかったろう」と言われたことがあった。都留さん自身佐賀高等学校時代には文学青年で作家を志していたこともあったと言っていた。スケールの大きいロマンティストであった。経済学部にはある時期までギスギスした息苦しい雰囲気があったが、その後都留さんが若い私たちの兄貴としていろいろ振る舞うようになってからは、わりに自由に、多少スツとほけて気楽な学部になっていったようである。

都留さんは台湾での軍務(このときの兵隊の話も都留さんらしく面白かった)から復員後、私より一年早く特別研究生になり、同じ時(1951年4月)と一緒に助教になった。特別研究生の残りの期間は都留さんは半年、私は一年半もあり、助手なみの給与で義務全くなしであっただけに、私には有難迷惑の感じであったが宮本先生の大阪大学への転任、九大兼任にともない、都留人事のついでに私が留守番の助教になったらしい。都留さんはすでに助教の貫録があったが、私はチンピラ助教で宮本先生から「都留君を兄貴として、都留君のするようになったらいい」と言われていたので常に兄貴と考えていた。初めて出た教授会で(紅茶が出るのだが)都留さんが飲まないのでも目の前の紅茶を飲みたいなと思いつながら飲まなかった。豪胆な都留さんも案外緊張していたのだろうか。

最初は都留さんはドイツ語経済、私は英語経済、週一回の講読だけで、今では考えられない呑気な時代であった。都留さんはエンゲルスの講読、私はアダム スミスをやる筈だったが、当時非常勤講師で行っていた西南学院で新刊書の展示の中でM.ドブの「資本主義発展の研究」に出会い、学生よりも自分の勉強のために選んだ。難解な箇所やラテン語を法制史の吉田道也先生に教えてもらい、西南の里見安吉先生(ダンテの専門家)にも訊ねて、先生が疑問に思われた時には外人教師にも訊ねて下さり、なんとかやっていたが、都留さんは「ここから先は俺はよう分からんから何頁までは飛ばす」と言われたと学生から聞いて、都留さんは豪胆だなど感心し、私は小心、臆病だなどと思った。

都留さんと私はいずれも数学が苦手で、お互い高校入試の成績がわるかったが、入学試験の委員長を田中定先生がされている時、試験科目で特に一科目極端に低い点の者は合格か不合格かが問題になった時に、先生が経済学部で最近助教になった二人はどちらも高校入試では数学は最低点(?)で合格したらしい。でも現在助教として何とかやっているから、一科目最低点でも全体の点数が合格点なら入れていいのではないかと言われたそうで、経済の最近助教採用の二人という都留・秀村とすぐ分かって、他の学部の人から「高校入試の数学の点が悪かったそうですね」と屡いわれた。二人とも田中先生からの被害者であったが、都留さんも数学の苦手とは私には嬉しかった。

私はすべて都留さんに「右へならえ」で研究生活を送っていたが、農業政策の田中研究室は何人も特別研究生、助手、研究生その他を抱えた大部屋で、都留さんは大変だったろうと思う。宮本研究室は私の助教二年目に特研究生が一人、次年度には特研究生、研究生各一人入ってきただけで以後なし。田中先生が国や県のいろんな調査、企画を引き受けられ、都留さんが研究室員を采配していて大変だったろう。一癖も二癖もある若者たちをうまく牛耳っていた。

田中先生は、当時はやっていた稗ひえつき節ふしで、「都

留の大治郎、嘉代子をおいて小倉たつときゃ目に涙」と唱っておられた。(当時都留さんは小倉から通ってきていた。嘉代子は奥さんのお名前)。



御長女誕生以前の都留家家族写真

都留さんには私も農村社会経済史研究のため農業調査を見学したいと都留さんたちが調査していた有明海沿岸の調査地を訪ねたこともあった。日本農業研究所の鹿児島県農業の調査では、田中先生を中心に九大経済学部・農学部、両学部出身の人たちで編成された時、都留さんが「僕は西志布志村の担当だが君も参加しないか。農業の調査はしなくてよい、私がするから。古文書を村で探したら」と誘われたので有難い話だと思い調査に加わった。鹿児島に集まり、それぞれの調査地に行ったが、初日には西志布志村には都留さんが来ず、私一人であった。村では調査員が七、八人来ていて「何をしましょうか」と言われるので、都留さんに電話で問い合わせると「一日だけ何とか持ちこたえてくれ。明日は行く」と言われた。その日私は古い書付や古文書を探してくれと頼んでごまかしたが、翌日も翌々日も都留さんは来ず、私は自分なりに野井倉開田の調査や馬場門の文書と聞き取り調査などしたが、集まっている調査員には明確な指令を全く出せず、まことに恥ずかしい思いであった。数年後の私だったら、「しめた」とばかり調査員全員に戦前・戦中・戦後の村の社会、農業の変化を村の古老たちに聞き取りをして貰って面白い記録が出来たであろうが、その頃までは農業調査を高度のものと考えすぎ、私の臆病とヨソモノの遠慮から何もできず、まことに惜しいことをした。古老の方言のまま、その土地の調査員が聞いて貴重な記録になったのにと今も残念である。五日目に農業研究所の所長が代わりに来られてホッとしたが、調査員全員に私は面目丸つぶれで真に恥ずかしい思いをした。以来「都留さんはいい人だが、一緒に仕事をしてはならない」と自らの戒めとしていた。

そういう出鱈目なところはあったが、経済学部の

全体を考え、後輩のことを気遣い世話をし、しかも常に批判を受けながらも頼りになる人であった。私はマルクス主義の牙城の経済学部で唯物史観はとらず複数主義で、マルクス主義の社会経済史研究の成果は利用するように努めていたが、一部の人々には侮蔑されて私自身は常に守りの姿勢であった。私は大学志望は国史志望だったが、東大大学院の学生で西洋史にいた兄から神がかりの国史には行くな、全国何処の大学も国史はやめろと言われて悩みに悩んだ末、高校の国史の玉泉大梁先生に御相談に行ったら先生から、「京大経済学部の本庄栄治郎先生のもとに行け。社会科学を学んで歴史をするのも良いよ」といわれて京大経済に行った。入学したら先生は大阪商科大学の学長になられて肩すかしを喰った感じであったが、黒正巖・堀江保蔵・白杉庄一郎・出口勇蔵先生らの講義には啓発され、ことに蜷川虎三先生の統計学では同期で文化勲章受章の森嶋通夫さんは「恐ろしく旧式の統計学だった」と酷評しているが、素養のなかった私には社会科学に目を開かせるものがあつた。やがて学徒出陣、敗戦、家の戦災、在外資産の喪失、預金封鎖のため九大に転学したが、法文学部の特徴を生かして経済学は最低限の単位を取り、国史、法制史、社会学、古文書学、美学など自分にむいた科目を聴講し、日本経済史のゼミから特研究生となった。宮本先生の学風に傾倒して経済学部の中での反感や侮蔑にも何とか耐え、ことに法文経三学部共同管理で全国的にもユニークな九州文化史研究所で古文書を利用して近世農村社会経済史に取り組んでいたが、都留さんは私におおらかに付き合ってくれて、まことに頼りになる兄貴であった。

後年に都留さんは、宮本先生と私の仲を何度も「あんたのそこはよかなあ」と羨ましそうに言っていた。都留さんは田中先生と田中大部屋のお世話をよくしていたが、田中先生は戦前は凄い調査、研究をされて業績もすばらしかったが、戦後はあまりされないまま多くの仕事を引き受けられて、それが全て都留さんに来るので、大変だったろう。

都留さんのすぐ上には助教授の筆頭に正田誠一さんがいて、海軍の甲板士官のように若い者達に睨みをきかし、私はとくに睨まれていたらしいが、正田・都留の関係はまことに微妙で、都留さんの『夏ほととぎす』に載せられている「正田誠一さんを偲ぶ」は実に正田さんを「よく知り、愛し、憎んだ」心情がよく書かれている。私が古文書の風呂敷包みを抱えてウロチョロして文化史研究所に逃げ込むのを正

田さんに睨まれていたが、六〇年安保の時、正田学生部参与の学生に対する指導には疑問を感じて副参与の私が協力しなかったため、助教授適格か否か教授会にかけると脅されて「どうぞ……」と言ったこともあったが、脅しにあった人は多く、震え上がって私のもとに相談に来た事務員もいた。都留さんは陰に陽に私をかばい、何人かには「秀村は（経済学部の）身体障害者だから優しくしてやれ」と言われたそうだが、私には恩着せがましいことは一言もいわれなかった。

それまでの教授会はなんとなく窮屈で、森耕二郎・向坂逸郎・高橋正雄の三巨頭のもと、講座派と労農派の対立や、田中教授以下教授・助教授すべて九大出身の同窓会的序列があり、戦後の頃には「革命間近」の烈しい雰囲気、その後も組合活動、労働運動の実践が人物評価になり人事にも及んでいた。長い間鬱積した雰囲気が都留さん以下若手にはあって、昭和三十六年三月の助教授採用人事では、都留以下の助教授層と教授層との対立となり、高橋・栗村教授が助教授側に加わり、助教授層が勝利するということがあった。私たちは「三月革命」と称したが、副田学部長は公平冷静な方で、正田と都留の烈しい折衝や私たちも協議の連続で皆クタクタになった。都留さんは相当憎まれて、近経の二人に頼みに行った私を正田さんが「あんな奴まで引き入れて」と非難されたので、「中国革命の民族戦線だ」と答えたと言われたそうである。私も身体障害者から民族戦線に昇格(?)したらしかった。

「三月革命」以後教授会も次第に変わり、都留さんはじめ若い者も教授会で発言するようになった。私は或る先生から「君は都留君と反対の派閥で助教授にしたのに」と言われ、都留とつきあうなど言われたが、宮本先生からは助教授になった時、森・向坂両先生には御挨拶に行くようにと言われたが、派閥のことは言われず、都留君に頼れと言われましたよと言いたかった。助教授層には派閥人事への反撥や、以後助教授が増えてきて旧制高校の雰囲気もあって随分学部が変わった。片山さん（正規の元海軍士官）と私（予備士官）は「都留さんはケップガンだ」と言っていた。海軍のガンルーム（青年士官室）の信望あるキャップである。

私にとっても随分住みやすくなっていたが、三九年には全国的にユニークな存在として精魂を注いできた私の研究の本拠（私の帰属意識は経済学部よりむしろ九州文化史研究所であった）、九州文化史研究所の施設昇格を巡って文学部と法・経済学両学部

連合との間で一年以上大いに紛糾した。長い間の約束と慣行、実績を無視して文学部が文化史の研究施設昇格は文学部のものと強引に決め、従来の研究体制が変わってしまうので、烈しく戦ったが、法経の教授会は強く反対せず文学部の強引さにあきらめたのには全く失望し、「勝てば官軍、負ければ賊」で、いろいろ非難、中傷、皮肉を言われ、九大は学問の場ではないと思った。以前から宮本先生は「マルクス主義一辺倒の九大には居づらかるう。阪大の助教授に來い」と言われていたので、年度末に辞表を叩き付ける気持ちであったが、思いがけなく次年度の流動研究員に採用の通知が来たので一年間流動研究員として阪大に行き、翌春阪大に移ろうと決心していた。しかし都留さんは転任に常に反対し「あんたはここ（九大）に居ることなとうと」と言うだけでどうしても賛成されず、他方ではキリスト教信仰の或る先生の文章に私の傲慢を厳しく反省させられて、九大を神の命じたもう場として努力しようと決意したが、あの時の都留さんの言葉はその後の私のために本当に貴重な言葉であった。人生の大きな岐路において道を踏み誤らず、九州の幾つかのフィールドに取り組みして、私らしい研究が出来てよかったと思う。

都留さんはドイツに一年の留学から帰国した直後、大学紛争のまっただ中で評議員となった。紛争が紛糾して各学部意見が分かれて、機動隊やむなしの路線と、徹底的に学生と対話の路線で、経済は後者で、紛争初期は正田、以後木下・都留・大屋・深町……等の存在は大きく、私が評議員のとき、有能な工学部長が「経済学部は小さい学部なのに木下のような竹中半兵衛や都留・大屋、深町……と軍師が何人もいる」と言われた。また或る人からは「法学部と経済学部とは同じように思っていたが、随分違い、弾力的ですね」と言われたりしたが、経済学部は都留・木下を信頼して、ズボラながら目くじら立てず、批判しながらも一緒に行く良さがあつた。入江総長のもとで紛争解決に機動隊を入れることで各学部非常にめ、経済は徹底的に話し合い路線を主張したが、結局は機動隊導入の決定がなされ、その直前の深夜に学部長交代で都留さんになり、私は再び評議員で都留さんを補佐することになった。

入江学長（この時から入江さんは総長を学長に改められた）は紛争の解決のため相当手荒い方法でされるので、都留さんは苦勞されたが、学長に頼りにもされていた。学長が評議会で御自分の意見が通らぬと立腹して席を立ち家に帰られたことも何度かあ

り、戻ってくださるようにと懇願の使者になられたが、馬鹿々々しかったであろう。各学部の意見をまとめて声明を出すことになった時には声明文の作成を学長が都留さんに依頼され、ホテルで都留さんは一晩かけて書きあげて私に読んでくれと言われた。私は「さっと読むとこれでいいと思うが、よく読むとおかしいですよ。前と中と後では食い違って一つの記事としておかしくありませんか？」と言ったら、彼は「それはそうくさ。各学部の意見をそれぞれ入れて書けばそういうふうになる」と、シレッとしているのには感心した。さっと読み流すとなんとなく一つの文章になっているが、熟読すると矛盾がある。しかし各学部の人は自分の学部の意見が入っていればそれで納得するから、矛盾があっても学長名で声明すれば何とかなんとかなるとタカをくくっているのには全く都留さんらしいと感心した。温かいようで鋭い言葉と彼一流のおとぼけがあって、私も評議員として都留さんとなら何とかやれるという安心感があった。

その後学部長として機動隊導入後の学部再建の処置に苦勞し、ことに紛争学生への配慮を教授たちに頼まれたり、また従来の学部長交替の時期に戻すために、中途交代後の任期でよいのに翌年まで任期以上務めるといわれるのには呆れて、私は三月に辞めさせもらった。都留さんには学部のことを考えて、それも自然で温かく、時にはいろいろ批判を受けながらも、批判しやすい雰囲気もあり、それも後には笑い話になることもあった。

都留さんの後任は湯村武人氏で、そのあと木下悦二氏が再び学部長になり、都留さんと組んで学部の改革を積極的にされた。都留・木下・湯村で鹿児島に行き、都留さんがとぼけた酒の論理で強引に真面目な岩元和秋さんに九大に来てもらうようになった面白い話も聞いた。

木下発案の大講座・経済工学科の新設と長年懸案の産業労働研究所廃止の都留案をドッキングした経済学部の大改革は産労研の所長が都留さんの親友の中楯さんで幸いした。当時私は学部長になったが、まったく無能で都留さんは「学部長をしたくないならそうしてやろうか」と言われたので、「是非そうしてください」と言ったが、今までの慣行が崩れると強い反対があったそうで私が学部長になった。文部省で経済工学科の最も重要な数学の話が出た時など私は近世の経済史なので、よく分らないと逃げて無能なのが幸いした。経済学部も案外無能の私を立てた方がうまく行くと考えていたのではないかと思

う。経済工学科については工学部にも経済工学科案があり、経済学部の案に反対で、旧制福岡高校の理科の先輩たちから私は叱られたが、専ら都留・木下が悪い奴でと弁解して逃げた。教養部の奥田八二部長も学生定員の増募に強い反対で、何度も叱られながらもなんとか進んだ。中楯さんが経済学部に移らないと言われるのに困ったが（都留・中楯の協同作戦だったのだろう。）おかげで教授ポストがふえた。私事になるが、中楯・奥田さんの令息が二人とも私のゼミ出身で、紛糾すると令息の噂をすると親父とは弱いもので、急になごやかになり助かった。新学科のために多くの人事をされて都留・木下・大屋・川端・武野はじめ多くの人々は苦勞されたと思う。私は専門の学問は分からないので、ただ「公平」を心がけた。

その後学部の雰囲気は言いたいことを言える学部にしてくれて「経済学を学ぶ気がない」私や相当変わった人をも抱え込みながら割に自由な雰囲気になったのは都留さんをはじめ教授会のおおらかさのおかげであった。以前森耕二郎先生がお酒に強く、十数人の教授会の雰囲気をうまく纏められていられたのを思い出して、都留さんに「森先生に似てくれましたな」と言うのと嫌われたが、お酒、風貌、しぐさ、何気なく言われたようで意味深い言葉などは大変似ていられると思った。教授会にドイツからのワインを持ち込んで大事そうに呑まれるのには、いささか呆れたが誰もなにも言わなかった。そういえば片山さんが酔っていたのだろう、大演説をぶちあげて皆がおとなしく拝聴したこともあったが、今考えるとあの時の教授会メンバーなればこそで、あれでよかった。面白い学部だったと回想している。

若い時に都留さんと西志布志村の調査でひどい目にあったので、以後協力して同じ仕事をしないと決めていたが、七〇年代二つほど都留さんと一緒の仕事をしたことがある。一つは『福岡県の百年』という本で、福岡県が明治百年の祝いに配るために、なんと数ヶ月前に秋の祝賀会に贈呈の記念誌の編纂をしてくれと頼まれ、そんな短期間に編纂など絶対にできないと断ったが、何回も頼まれ、総務課長が私の高等学校の隣のクラスで、彼は以前に県知事選挙で反対派の運動をしたために左遷され、やっと総務課長に帰って来たのに、記念誌ができないとまた問題になるぞと友人たちに言われたが事実上できないと悩み、都留さんに相談に行ったら、都留さんが大分考えていたが、「写真でいこう」と言われた。明治から百年の記念になる写真を集めることにして、

総務課を通じて各地に連絡をとり、また市民の地方史の研究をしている人たちに呼びかけて写真を集めた。案外に面白い写真が集まり、これをテーマごとに配列して我々研究仲間や市民の地方史家に解説文を書いてもらって編集したが案外好評であった。短い期間、徹夜の連続で、都留さんも大変であったろう。この時の都留さんの発想は私には全くなく心から感謝した。

もう一つ都留さんと一緒にした仕事は、経済学部が創立五〇周年になった時、私は経済学部の五〇年の思い出を比較的にくだけた調子で書き、五〇年史の編纂をしたいと教授会に提案したところ、「なかなか書く人はいないよ」、「難しいよ」と乗り気でなかったが、私は何とか五〇年のけじめを祝いたいと思ひ、ともかく任せてもらい、卒業生に広く呼び掛けて学生時代の思い出を書いてくれるようにした。初めは五〇人集めればよいと思っていたが、案外に卒業生たちが書いてくれ（多い期と少ない期があったが）、「これはできる」という確信を持った。私は「九州大学五十年史」が正史ではあるが、もっとくだけた面白い年史にしたいと思ひ、事務の人やその他古本屋や飲み屋のおばちゃんや、そういう人にも書いてもらおう、学部のくつろいだ姿を出したいと思つた。其の頃から都留さんが乗り出してきて先輩の九州経済調査会の浜正雄会長やその他の有力な人たちと座談会をしたり、有力な教授会メンバーで思い出

を語ってもらったり、飲み屋のおばちゃんから都留さんが聞き書きを書いてくれて、くだけた面白い年史になった。途中で正田さんも経済学部の各講座の歴史も載せてほしいと言われ、各講座に頼んで書いてもらったが今考えると、あのときやってよかったと思う。書名も種々候補があったが、都留さんが『箱崎松原の青春』という書名を提案されて、それになった。法文経三学部はもとは法文学部としての創立であるが法学部も文学部も編纂されず経済学部だけで、とくに同窓生に好評であった。その時には都留さんが常に私の背後で非常に力をいれてくれ時には前線にも出てきて指示されたのは大変有難かった。

都留さんにはまだまだ書きたいことが多いが、他の多くの方々が適切であろう。都留さんにはまだ多くのことをして欲しかったと思ひ、あまりにも早かった御逝去をいたむこと切である。



旧制佐高同級生（三浦、都留、中橋）東中洲水上公園にて

同窓生健筆模様



正田誠一さんを偲ぶ — 弔辞

九州大学名誉教授
故 都留 大治郎氏

1942(昭和17)年卒

夏ほととぎす 勸九州大学出版会 1989年4月刊行



先生の遺影の前になつて、私はつきせぬ思い出の一端を語りかけたいと思ひます。公人としては、あなたがその発展に力をつくされ、また先にその所長を務められた産業労働研究所の所長として、私人としては一人の友人、後輩として。いくら語りかけても、もう、優れた頭脳はなんの応答はないのだけれ

ど、私はなん度もなん度も語りかけたいと思ひます。

今は、私は最初の出会いを鮮やかに思い出しています。それは敗戦直後の荒廢の極になつた研究室のなかでした。その出会いは、私にとってきらきらと輝く新しい星とのめぐり会ひでした。私はそのあやしいまでの光芒に魅せられ、極端にいうと連日、

朝から深夜、翌朝まで起居行動をともし、人間や思想を語り、そして安酒に酔いしれました。お互いに若かった日の一番嬉しい思い出のよみがえる時代です。私は貴方との交遊を想いだして不思議でしかたないのは、この25年の間のある時期は蜜月の、ある時期は激しい反撥と憎悪がくりかえされてきたことです。私はこういう形で長く交遊をつづけた友人、先後輩を他にはもちません。まことに不思議でしかたありません。お互いに思想や行動について反撥し、それが激しい憎悪にまで高まったこともなん度かありました。だがどういう憎悪の極限においても、決定的な瞬間には私はいつも貴方の側に立つ覚悟はしていました。あなたも私の最終的な危機の瞬間には、私を救ってくれるという安心がありました。今悔やまれてならないのは、今度のあなたの病いに、なにも私が役立たなかったことです。

正田さん、あなたは優れた組織者であり、演出家だった。敗戦後の民主化時代に、九大に彗星のごとく現われて以来、安保、米軍機墜落事件、今度の命とりになった最後の沖縄問題にいたるまで、いつもあなたはその立役者だった。優れた演出家であり、瀟洒なスタンドプレイヤーであった。あなたは、一つのことにとり組むと、それだけをひたむきに追う、良い意味の事件屋でした。家庭や自分の健康はむしろ、場合によっては研究生活さえ放棄して、それに没頭した。私はいつもそのメリハリのよくきいた演出に舌をまき、その動員力のすさまじさに閉口して逃げだした。あなたの義兄であり、同時に私どもの先生であった亡くなった吉村正晴先生の傍にいと、私はいつも春の日の海辺に遊ぶ感じがした。けれどもあなたは、冬の海の怒涛であった。その品をつくったさかまく怒涛に、私は反撥を感じ、ていよく逃げだしました。私は今、大きくうねって碎け散り、静かにひいていつている波を、深い深い悔恨の情でみています。

正田さん、あなたは凄絶の酒徒でした。あなたの先生であった森耕二郎先生のお通夜の晩に、私はポツリといった。「森さんも、一生を人の三倍くらい飲みつづけたのだから、もって瞑すべしだよ」と。森先生の学問の遺鉢をついだあなたは、酒もまたよき伝承者であった。けれど、あなたは先生のまた2～3倍は飲んで、いまだ瞑していないと思うのです。その貴方がこの2、3ヵ月はその好きな酒さえ喉にとおらず、おそらくは生涯をつうじてバカにしつづけたら「おはぎ餅」などを奥さんにねだったという話をお聞きして、私は正田誠一を襲った病魔を

激しく憎みます。酒のみでも、スタイリストであり、自ら横綱の酒と自称していた正田さんは、私のような足軽酒をバカにしてこう、ある酒亭の雑誌に書いている（ほおづき一創刊号）。

正田さん、貴方は生涯を通じ権力に反抗してきた。自ら清貧の学徒に甘んじてきた。私も貧乏だけれど、それ以上、奥さんには悪いけれど、赤貧洗うがごときという状態でした。赤貧はむしろ収入が少ないという意味ではない。研究者の収入では、そのぜいたくで一流ずきの消費欲の埋めあわせがつかないのです。ぜいたくな精神と支離滅裂な消費欲とがあやしくむすびついていました。それだけではない。あれだけ権力に反抗した人間が、自ら権力指向型の性癖をうちに秘めていました。内に秘めていただけでなく、子供の時からあり余る才能をもってお山の大将としてすごしてきたからでしょう。公然と常に主役、ヒーローでないと気に入らなかつた。おそらく私など、愚鈍にして、間尺にあわなかつただろう。だが権力者がたいてい人間としては善人が多いように、正田さんも、その意味では無邪気な善人だった。事件の渦中であって、ヒーローとして花道から登場する時、おかしきほどにその善人さをさらけだして独得のスタイルをとったものでした。その姿も、私の前にはもうありません。

私と正田さんとの最後の別れは沖縄であった。正田さんは学術会議の沖縄問題で走りまわり、私も調査のため、ゆっくり時間をもちませんでした。私はその時もあなたの注文の一つを承知し、他方できびしく断りました。

私は、私たちの奇妙な交遊がまだまだつづくと思っていた。お互い老いさらばえてしまって、二人だけで静かな秋の日ざしのなかで、ゆっくりとお互いの嬉しい思い出や、苦い思い出を語りあうことがあると思っていました。あなたは今、こういう形で、私との会話を絶ちきってしまった。最後まで憎い人でした。その人に、最後に私は道元の言葉を捧げます。（昭和49年10月）

（編集部注記）

※故・都留大治郎氏（1919年4月12日生、1988年4月7日没）は、1942年9月九州帝国大学法文学部経済科卒業。軍役を経て1946年九州大学大学院特別研究生、1951年九州大学助教授、1964年教授、経済学部長・産業労働研究所長などを歴任、1983年3月退官、1987年11月 第41回西日本文化賞受賞

※『夏ほととぎす』（P266～P269）より転載

●都留大治郎名誉教授が生涯をかけて追求した二つの大きなテーマ

※【農業政策】 戦前から戦後にかけての日本農業の発展を、いわゆる自小作前進論ないし中農標準化論の視角から鋭くしぼって論証した。そして、戦後農地改革を占領軍による「上からの」改革としてのみ捉えるべきでなく、すでにその内実が戦前期に農民層のエネルギーにより「下から」準備されていたと評価した。その後「地域農業における生産力主体の形成」がテーマの一つとなった。また、日本農業における自給と保護とのあり方に関し、ドイツをはじめEC共通農業政策との比較にいち早く取り組んだ。

※【まちづくり・都市政策】 福岡市、中津市など九州各市のマスタープラン（都市計画の基本方針）作りを手がけた。最も大きな仕事は、5市が合併してで

きた最初の北九州市のマスタープラン策定であった。北九州都市協会会長・出口 隆氏と福岡シティ銀行頭取・四島 司氏（いずれも当時）の対談には次のような発言がある（西日本シティ銀行ホームページより）。

四島 北九州市が発足して、初代市長は吉田法晴さんでした。具体的なマスタープランは。

出口 今度は九州大学の都留大治郎さんの出番でした。市民参加をポイントに、“太陽と緑のまち”をうちだされましたが、煙の街だった北九州のイメージを一掃するすばらしいテーマでした。

※末尾の「道元の言葉」を都留先生は確かに述べて終わりにされたことを会場にいた複数の人々が記憶している。しかし、言葉そのものを記憶している人を探し出せなかった。原稿にも、その言葉は記されていない。



九大特別研究生の時代

九州大学名誉教授
元福岡県知事
故奥田 八二氏
1944(昭和19)年卒



敗戦から九大特研生へ

1945年8月15日が来た。朝からのラジオは正午を期して重大ニュースがある、天皇陛下直々の放送があると報じていた。広島や長崎への新型爆弾の新聞記事は知っていたが、これが決定的なものだとの結びつきは誰も考えなかった。経理室の兵たちは15人ほど、皆、内野宮さん（注記：奥田氏の所属部隊経理室が置かれていた宮崎県川南の民家）の庭に集まった。「玉音放送」が始まった。よく聞き取れないが、戦争は終わったという趣旨は良く分かった。誰も特にモノいわなかった。「終わったのか」というため息はあるが、どうしようということは誰も考えず、言わなかった。8月の真夏のカンカン日照りの下であった。

部隊が解散して、思い思いに目的地に向かうことになったのは9月に入ってからだと思う。私は、経理室の残務整理で宮崎に残留していて、11月半ばだと思いが、相生（注記：奥田家の所在地・佐方^{さがた}の近傍の都市、兵庫県相生市）に帰った。心のかなで

一番強いわだかまりは、仕事を見つけることだったが、しかし事は簡単ではなかった。箱崎に舞い戻ったり、宮崎の川南に行ったり、悶々の日がつづくなかで、私は九大の三田村一郎先生に就職口があれば頼むという葉書を一本出していた。宮崎からまた相生に戻って山仕事などしていた、そんなある日、三田村先生から手紙が来た。九大法文学部経済科の特別研究生のポストを開けておるので早く出校しなさいと言う。でも、なぜか私はそれにも食いつく気持ちが湧かなかった。私を決意させたのは養父（注記：奥田氏は旧姓・田^{たなびき}麿、1934年14歳のとき養子縁組で奥田姓に変わる）だった。大学に戻るのが良い、生活費は何とかなるだろうと彼は言う。特別研究生などというものについては予備知識がなかったが、養父の積極性が私を動かした。私は応諾して九州に下ることにした。

大学院特別研究生というのは、学生の身分である。手当は出るが、月給ではない。だからボーナスもない。代わりに学割が効く。戦時中、学生が徴兵免除

されていたので、助手にせず学生の身分で研究に従事する途を作った。その制度が戦後に生きていた。助手と助教授の中間の待遇という見当で手当が決まっていたらしいが、戦後はベースアップもなく、手当が生活の足しになるには程遠かった。戦時中は喜ばれ、戦後は好かれなかったらしい。そんなわけで、「特研究生」は前期2年、後期3年だが、辛い立場にあった。尤も、助手といえども高くない月給である。誰しもあくせくした戦後生活。不平等とは言え取るに足らない。懸命に努力してこそ、誰でもやっと食べたのである。

研究室生活と言っても専攻は本人が決めよということだったので、三田村先生には悪いが、森耕二郎先生の下で社会政策をすると三田村先生に告げた。それで良いということで、森教室に属することになった。私はなぜか労働問題に関心が強かった。福岡で労働問題といえば炭鉱のウエイトが大きい。学生時代、小倉の義伯母の紹介で臼井の田籠炭鉱に行ったのが、私と炭鉱の最初の出会いだった。次は、佐方の奥田定雄氏が関係しているとかで山口県厚狭の炭鉱を一寸覗いたことがあった。

与えられた研究室スペースは、法文学部の建物のなか、金融関係の書物が並べてあった書庫の東南隅で中庭が見える三階にあった。その対面に、川口武彦氏が同期入学ということで私より何日か早目に陣取っていた。彼は私より大学入学が2年先輩だが、満州の銀行から引き揚げて学究生活に入ったとのことである。何でも私より10歩も20歩も先を知っている人で、私の研究室生活は教授というよりは川口氏がすべてリードしてくれたと言ってよかった。川口氏は田中定教授の下で農業政策を専攻する形になっていたが、いきなり封建論争（注記：日本資本主義の特質を半封建的要素との関連で把握する学説の是非を巡る昭和戦前期の論争。本稿末尾の「講座派」「労農派」の注記参照）というようなことを聞いたのも川口氏からで、二人とも当面の関心の的はこの問題についてであった。「講座派」に属するのが誰で、対応する「講座派」に属するのが誰かというような全国分布についても川口氏から手ほどきを受けたのである。

川口氏は、田中先生の指示で向坂逸郎先生の秘書のような役割を果たしていた。研究室の管理も彼がしていた。先生の手紙処理や東京との往復旅行関係も彼が世話した。研究室界限ですぐ彼と親しくなった私は、向坂先生の情報を念入りに彼から知らされたし、研究生活そのものも川口氏を通じて、向坂先

生の影響を強烈に受けたのであった。

向坂先生は戦時中の追放解除により、「復帰教授」として、1946年から47年に東京から九大に來られ、住居は東京に置いたままだったので、集中講義が中心だった。高橋正雄、石浜知行を加えた三教授はその復学を歓迎された。もう学部は卒業していたのだが、私は何回か学生に混じって傍聴したものだ。

向坂先生は、ヨーロッパ近代画について本職に劣らぬ評論ができた人で、画集の解説執筆もあった。その向坂先生が労農派の旗手で、講座派に対抗して日本資本主義論争をしていた。山川均氏を先頭に、大内兵衛、ついで向坂逸郎と言われていた。労農派の重鎮として、価値論、地代論、日本資本主義論と広い分野に論陣を張り、担当講義は経済学原論であった。川口氏の勉強も同じ道筋を進む傾向にあった。向坂先生の論文を逸早く読んで私に紹介してくれた。向坂先生を最初に知ったのも川口氏の紹介による。川口氏は、先生の旅行の見送り出迎えをきちんとした。私も彼に倣うことが多かった。

私は封建論争のどちらに組するというのではなく、常識的レベルでどちらかといえば講座派的な見方をしており、向坂先生にひどく叱られたことがあった。素直に考え直し、私も労農派に組するように自然に傾いていった。毎日川口氏と語っていたということもそうなる必然性を持っていたであろう。

大牟田市倉永の妹さん宅（坂梨家）に寄宿されていた向坂先生を倉永に尋ねるチャンスも少なくなかった。向坂先生は福岡市練堀町に寄宿されたこともあり、その石橋邸は特急クラスの住宅だった。二階の広い二部屋を我がものように使われていた先生を、多くの学者、労働者が尋ねたものだ。ゆき奥さんも何回か来福された。我々は、向坂先生からマルクス伝をドイツ語で読む学習会に誘われ、毎週石橋邸を訪ねる時期もあった。ドイツ語も鍛えられたものなのである。

特研究生を経て助教授へ

森耕二郎教授の下に社会政策を専攻すべく研究室に残った私だが、川口氏を介して向坂先生の門下生となり、講座派の森先生からは破門の宣告を受けたのだった。それまで私は森先生が講座派とは全く知らなかったのである。森—吉村—正田の流れが厳然と学部内にあり、若いのでは松井春雄氏、都留大治郎氏がいた。私は何派たるかの意識はなかった。ぼんやり者、お人好しと言われても仕方がない。道理で、このグループから冷ややかに接しられ、のけ者

にされていたわけである。(注記:都留氏については、人間的には正田氏との交流が密接だったが、理論的には講座派系とは言えないのではないかと、当時を知る人々の証言がある)。

1949年だったと思う、森先生が私の研究室に珍しく入ってこられた。酒気がもちろんあった。この先生は大学でもアルコールを持ち歩き、酒気なしにはおれない人であった。部屋の私の掛けている机辺に近づくと「奥田、君はもう帰れ、そして奥さんと仲良く暮らすのだ」という意味の台詞を残して出て行かれた。後で私は、それが破門であった事を理解したが、その瞬間はポケットとその言葉を聞くだけで、酔っての言葉としか受け取らなかった。多分森先生は、私が向坂派と行動を共にしているのが気に入らなかったのであろう。もし私がその瞬間、森先生の発言内容を正確に受け止めていたら、私は居たたまれなかつたらうし、本気になって九大を去っていくことにしたかもしれない。なのに、私はあの言葉を正面から受け止めずに不感症然としていたのである。だから、その後も配給の酒が貯まったら、森先生に贈ったのである。古小鳥の森家に酒を持って行ったとき、偶然同時訪問となった吉村正晴先生は、私に一物あってか、モノも言わなかった。

1949年から新制大学が発足した。新しい大学を目指し、どこも変身に奔走していた。八幡大学は大学の前は専門学校で、私は大学院後期ということで非常勤講師に1年間それも夜間部担当で山の上まで毎週通った。これも生活の一助ということだった。科目は社会政策、生徒に近づくのが好きだったので、すぐに慣れ親しみ、講義が終わってから、学生達の要請もあり読書会を開いた。ヒルファーディング金融資本論を輪読した。新制大学の発足に当たり、この八幡大学に就職しないかと、馬場克三教授が勧めてくれた。私は生返事していた。また、川口武彦氏の出身校・松山高商(現松山商大)からも熱心に誘いがあった。松山に行こうかと心に決めかけたこともあった。そういう時に、九大教養部へという勧めがあったので、迷うことなく決めたのである。1950年5月13日発令で助教授として久留米第三分校に赴任したのであった。その決定については、九大内部特に経済学部内部で曲折があった。森教授が松井春雄氏を推すのに対し、向坂先生が強く私を推薦してくれたということだ。特研究生で1年上の湯村武人氏が決まったよと報告してくれたのを覚えている。湯村氏は経済史助教授として半年前に赴任していた。私を推してくれて名誉に思う。特に向坂先生の強い

押しには、今は感謝するしかない。

さて、私は九大助教授に推されるに際し、論文は？というので、慌てて書いた。題して、「英国労働運動史上のチャーティズムの意味」だったかと思う。研究室で勉強すると言っても片や生活に追われ、労働講座に走り回る日常であったし、向坂先生、川口氏らとの付き合いもあって、ドイツ語の勉強、日本資本主義論争について時間を割くことが多かった。だから、傍ら自分固有の勉強としてイギリス産業革命史、労働運動史を勉強していたのである。社会政策専攻の名の下、経済学の分野に首を突っ込んでいたのである。勿論、経済学の分野としては賃金論を基本としていた。資本論では「労働日」と一致する分野でもある。向坂先生の「地代論」は読みかじりに過ぎないと言える。

姫路高校時代にマルクス禁制下にあつて野里の古本屋で見つけた一冊の本「社会問題十二講」(生田長江著)というのを熟読して、その中でロバート・オウエンやマルクスやクロポトキンなどについて一寸知っていたのが特研時代のこの研究テーマにつながる。この本で一番よく分かったし、面白かったのがオウエンの空想的社会主義で、マルクスの剰余価値学説は理解する能力を持っていなかった。専攻を社会政策とし、研究テーマをイギリス労働問題としたのも、この一冊の本と縁があるように思える。勿論、九大経済科にいる時に森教授のゼミに出席し、労働問題に手を染めたのも、オウエンの影響があったからかも知れない。理想郷の追求の夢がこういう形で実現化したと言える。学生時代にも相生の造船所の労働状況についてレポートを書いたこともある。また九州の炭鉱労働にも関心を持つことになった。戦争で一時忘れていたが、研究室に戻るようになった時、再び森教室の扉をたたいたのであった。そし



1983年、奥田八二知事を励ます会に集った九大の仲間たち。前列左より後藤賢一(物理学)、深山喜一郎(法律学)、奥田八二(社会思想史)、佐久間寛(心理学)、深町郁彌(金融論)。後列左より吉田徹夫(英文学)、衣笠哲生(政治学)、緒方道彦(生理学)、矢ヶ部巖(数学)、福留久大(経済学)の各氏。___付きが経済学部関係者。



1960年4月 柳川下りを楽しんだ日、前列右から川口武彦、白井夫人、後列右から大原長和、奥田八二、徳永新太郎、白井正、江嶋寿雄、小島恒久の皆さん。撮影は徳本正彦氏。____付きが経済学部関係者。教養部旧社会科学教室写真アルバムより。

て特研生の中でマルクスに惹かれる傍ら、研究対象をイギリス産業革命時代の労働運動に、さらに再びオウエンに立ち返ったのであった。ともあれ「労働問題」の周辺をうろついていたのである。

研究というもの自然に「遡る」という傾向を持つものだと思う。イギリスの産業革命時代の勉強をしていると、19世紀から18世紀、またまた遡り、14世紀のあたりまで行ってしまう。トーマス・モア、そしてエンクロージュアについても興味を持つ。農業問題、地代など当然に対象になる。手工業、マニュファクチュア、友愛組合、職人団体も面白くなってくる。それらをぐるぐるやっているうちに、九大教養部に行くために論文を要請され、チャーティズムについて書くことになった次第である。原書ではハモンドのSkilled Labourers、Town Labourersを時間をかけて読んだ。コールの労働運動史、ウェブの労働組合運動史の翻訳などがよい参考になった。またマックスベアーからは、そのイギリス社会主義史を通じて特に指導を受けた。A History of British Socialism の訳である。平凡社の政治学辞典によると「イギリス社会主義に関する最高権威書、特に第3部においてチャーティズムを労働階級の最初の組織的政治闘争と規定したことは著名」と紹介されている。論文はそれを大いに引用、模倣したものになっていたと思う。森教授が、教授会で原稿のまま、それを推薦する台本にされたと聞き及んでいる。

(昭和62年12月27日)(平成2年1月15日)

(編集部注記)

※故・奥田八二氏(1920年11月1日生、2001年1月21日没)は、1943年9月九州帝国大学法文学部経済科

仮卒業、44年9月卒業。軍役を経て1946年九州大学大学院特別研究生、50年九州大学助教授、64年教授、学生部長・教養部長を歴任され、1982年12月退官、九州大学名誉教授。1983年4月福岡県知事に就任、3期務めて1995年4月退任。長期にわたる克明な通常の日記記録のほかに、幼時から九大助教授就任時までを回顧した覚書を残された。1983年の暮れから98年5月にかけて断続的に書き継がれた心覚えの記録で、発表を意図したものではなかった。そのため重複や未整理部分が含まれていた。今春1月、奥田八二著・葦水忌実行委員会編『幾歳月～思い出の糸をたぐって』として、取捨選択の整理を加えて29項目を抜粋したものが公表された。ここでは、「25・日本の敗戦とその前後」「26・九大特別研究生として」「27・九大助教授までの歩み」からの抜粋部分と同書に採録されなかった部分を統合して一本化したものを掲載している。

※【講座派】 1930年代の日本資本主義 論争で、山田盛太郎『日本資本主義分析』および平野義太郎『日本資本主義社会の機構』の主張・方法にほぼ賛同し、日本資本主義の発展とその矛盾を半封建的諸特質との関連で把握しようと試みた学派。「日本資本主義発達史講座」の主要執筆メンバーであったことにより、この名称が定着。日本農業における半封建的地主制の支配を認め、明治維新後の天皇制国家を絶対主義国家と規定する点に特徴があり、その主張は、当時のコミンテルンの32年テーゼの主旨ともほぼ一致していた。代表的理論家は、山田・平野のほか、野呂栄太郎・羽仁五郎・服部之総・大塚金之助ら。講座派理論は、日本の社会科学諸部門のその後の発展に大きな影響を及ぼした。(山川出版社『日本史広辞典』より)

※【労農派】 昭和戦前期に日本共産党ないし講座派と対立したマルクス主義者の一グループ。福本イズムにより日本共産党が再建されたが、天皇制・地主制の封建的要素を過大評価する27年テーゼ以後の共産党の戦略に反対して、堺利彦・山川均・荒畑寒村・猪俣津南雄・鈴木茂三郎らによって1927(昭和2)年12月に創刊された雑誌「労農」に由来。その後日本資本主義論争が展開されると、講座派と理論的に対立した櫛田民蔵・大内兵衛・向坂逸郎・有沢広巳・土屋喬雄らの学者グループも労農派とよばれるようになった。近代日本農村の伝統的要素を日本資本主義成立過程の特質から説明し、地主・小作関係の非封建制を主張する点にその理論的特徴がある。(山川出版社『日本史広辞典』より)

リレー随想

とお で しんどう……



八幡ビルディング協会会長

原田 準一氏

1951(昭和26)年卒

昨年の12月6日にあった「経済学部の同窓会サロン会」の忘年会に久しぶりに出席した時に、

進行の平井事務局長さんから「皆さん、今年を振り返って、一言ずつお願いします」と言われて、私は「こうして元気で皆さんにお会い出来たことが一番の嬉しい思いです」と申し上げた。

それにしても、タイトルの「とお で しんどう……」とは、「十で神童、十五で才子、二十過ぎれば、只の人」の最初の部分であるが、私がこの言葉を意識したのは、昭和23年に九大に入学した、二十頃のことであった。

振り返ってみると、「十で神童」などと厚かましくも自分でも思ったりした若者は、小学校5年生で、初期の「結核」との病因で1年近く学校を休み、それでも担任の先生の恩情と戦争という混乱のドサクサにまぎれたということもあったのか、旧制の県立中学校に入り、その後は戦時の特例として「理系の学生の徴兵延期処置と入学枠増」に乗って、北九州市にある「明治工業専門学校（通称明専・現九州工業大）」の応用化学科に籍を置いた。入学して当然のことながら化学の本を読み、先生方の話を聞かせていただいたが、卒業間近になってからは「進学か就職か」の悩みの中で、もう一つその根因を成している「理系の間人か文系の間人か」の問題をしっかりと考えさせられた。その時に思ったのは、子供の頃から自然に、親が読んでいた新聞を読み、まあまあ理解が出来ていた自分を感じて、「そうだ！俺は文系だ！」と決めて、ならば九州帝国大学（確か、入学した昭和23年頃には帝国がついていたと思う）だ、と思いが固まった。

理系から文系に方向を変える（それも一般教養を身につける高等学校からではない専門学校から）のは大変なことであった。入試項目にあったと記憶す

る「哲学」をどのように消化するかが問題であった。「明専」で唯一文系的な授業をされたM教授（当時の小倉市の弁護士会会長で、一高・東大出）に、個人指導をお願いした。深い師弟の繋がりもない若者の申し出を聞き入れて下さったのは、資質の問題はにおいて、とにかくこれからの若者に対する期待に基づくものであったと思う。約半年の間に週一回、先生の自宅でということになった。ご指導は勿論一対一で「コタツ」に入り、それこそ咫尺の間で行なわれた。「哲学概論」なのだが、難しいドイツ語が盛んに出て、書き取るのに苦勞をした。幸いというか、先生の強度の近視眼のお蔭で、書き取る内容までには目が届かなかった（ようであった）。不肖の書生は、それ等の空気を吸わせていただいで、文系学生の一員となることが出来た。

入学時に印象に残ったのは、経済原論を説かれた「向坂逸郎」先生の最初の講義の時のことであった。箱崎の正門に入って左前に見えるコンクリート造りの法文学部、階段教室であったが、戦後間もない時の、先生の講義とあって、満員であった。先生の第一声は「こんなに大勢の皆さんが聴いてくれることを感謝します」であった。次いで言われたのは「皆さん、別に学校に話を聞きに来なくても良いですよ」であった。それ迄は学校とは、まず出席するものと思い込んでいたし、思い込まされてもいたので吃驚した。更に先生は「学校に来んで、本を読んだら良いですよ」と言われ、本の読み方についても話をしていただいた。この時、大学生活が始まると実感させられた。向坂先生の教え、と認識した「テーマを持って、踏み込むように」のご意向に反するかの如くに、ゼミでは、宮本又次先生の人間味豊かな感じに引かれて、「日本経済史」を学ばせていただいた。先生晩年の大著である『宮本又次著作集』（全十巻）は座右に置いている。その中で先生は「大阪は生活の街である」と書いておられる。私は大阪の商社である「伊藤忠商事」に勤め、大阪生活も3年の経験をしたが、隠然たる活力を感じたものだが、現大阪の橋下市長の「都構想」の話も共感するところもあるが、この宮本先生の著作集あたりを参考にして「温故知新」、大阪人特有の対話力と機知とで、大阪を甦らせることは出来ないものかなど思ったりしている。

ところで、私も神童であったなどと、よくも厚かましく書いたものだが、只の人の中の只の人になっている私でも、古稀・従心の歳を遥かに過ぎて「矩を^{のり}超えはしない」わけだから、もう少し勝手気儘に書

かせていただくこととしたい。

私は60歳くらい迄は新聞は「朝日」を読んで来た。社をリタイヤして帰郷、近隣のお世話をする中で「毎日」の販売店主と会った。「毎日」を読むようになって、記事で識った「岩見隆夫」「岸井成格」「山田孝男」の各記者の文章が読み易くて良いように感じて30年を超えた。今年亡くなられた岩見さんは、常々、岸井・山田氏達の後輩に、「ゴシップこそ新聞の原点」と言っていて、ややもすると、政治、経済等の硬くなりがちな文章（硬派）ではなく、事件や街ダネなどを取り上げる（軟派記事という由）ことが主流であるとして、そのような政治記事を編み出すのに腐心したと山田記者はその追悼文に書いている。「毎日」の記事が読み易いように思える（それでいて、どこか突っ込んだ書き方になっていると私は思うが）のはそのためであろうか。

私は出して恐縮だが「九州工業大学」の同窓会報には、40～50年前から、何度か投稿して来たが、理系（機械・電気・冶金・鉱山・化学）だからか、硬派の記事が多いと思われ、恥を覚悟の上で、旅行記事や日常生活のエピソード等を書いてきた。

本文のタイトルを「とおで……」等と奇を衒ったようなものにしたのも、少しはその影響もあったかと思うけれども、真意を申し上げると、書いたからには読んでもらおうと思ってのことであり、貴重な時間を消費させてしまったことをお詫びいたします。

また、執筆のご依頼をしていただいた、福留先生の（私が先輩であるからとはいえ）正座をしてお姿には、うたれました。同窓会の事務局長をしておられる藤井先生には、ご鄭重なるご依頼状を戴き、又、事務局の藤原様には優しい諸案内をしていただいていた感謝の他はなく、御礼を申し上げて、駄文の筆を擱かせていただきます。

有難うございました。



リレー随想

九経43E11クラス会と 学生生活の思い出



橋本 寛氏

1972(昭和47)年卒

九経43E11クラス会は、卒業して40年以上過ぎても続いており、その経緯と、当時の学生生活の思い出を語ってみたい。

活の思い出を語ってみたい。

当時は入学すると六本松で教養課程を1年半過ごしたが、学部と名前順でクラス分けされた。11クラスは昭和43年（1968年）に経済学部へ入学した、姓が「た」から「は」行辺りの者になる。

現在東京支部は、私と西岡君、西嶋君、西村君、橋本（純夫）君、林君、久野君、深島君、藤田君の9人で、福岡本部は、豊瀬君、中村（壽邦）君、長谷川君、樋渡君など。尚、純夫さんはクラスの最年長で、現在、経済学部・東京同窓会の監事として、お世話をされている。また豊瀬君は、福岡に移られるまで、本クラス会の幹事としてお世話をされ、今も福岡で同窓会の輪を広げられている。尚、今年は5月31日に東京で、11月29日には福岡で全国合同開催を予定している。

さて、入学後暫くすると、勉学やクラブ活動、アルバイトなどが軌道に乗り、クラスの集まりは段々希薄になった。ところが、九大本部地区の建屋に米軍のファントム戦闘機が落ちて、学内が大騒ぎになり、再びクラスの結束が強まることになる。

当時、六本松キャンパスでは、民青や中核など多数のセクトが、反戦や基地問題、階級闘争などで活動を行い、シュプレヒコール、ナンセンスなどの言葉が飛び交っていた。友人の記憶では、宿舍が襲撃されたり、クラス討議が妨害されたりしたそうだ。こうした中、墜落を契機に、団交など学生運動も激しくなり、学長を先頭に全学を上げて抗議行動を行う事態に至った。11クラスは、殆どがノンポリだったが、クラス討議を良く行っており、また、様々な集いに手分けして参加し、情報収集を行った。結果、全学デモにはクラス独自で参加することとし、ヘルメットを10個程調達して、ペンキで銀色に塗り、銀

ヘル部隊を編成して参加した。その後、学生運動は、東大紛争など、全国で激しくなったが、我々は経済学部への進学の時を迎える頃から、次第に運動から遠ざかっていった。しかし、経済学部へ移っても六本松の強い結びつきは続き、今日に至っている。

ここからは、勉学のことにはさして置き、当時の学生生活や博多の様子を思い起こす縁になればと、自身の思い出を記してみたい。

私は父の言いつけで、飯倉で下宿屋をしていた叔母のところに寄宿した。下宿生は西南学院や福大の学生が多く、仲良くなってお茶会や学園祭にも出入りした。

半年経った頃、純夫さんが博多駅裏にある会社の住み込み夜警アルバイトを見つけてきて、純夫さんと、自称博多のピーターこと壽邦君と3人で1年ほど住み込むことになった。これが3人の結びつきを強くした。夜警のアルバイトは、家賃がいらず、学校が休みの期間は纏まった手当もいただけた。それから経済学部へ移るまで、博多駅から祇園界隈、中洲のとっつき辺りまでが生活（飲み歩きの）範囲になった。純夫さんはアルバイト探しの名人で、博多駅前にある寿司一番の出前のアルバイトを探してきた。寿司一番は我々の溜り場になり、長崎へ買出しに連れて行ってもらったり、ネタが古くなったと言ってはマグロのステーキをご馳走になったり、随分恩恵に与った。僕らは卒業後も、博多へ帰る度に、店に寄らせていただいた。現在は当時坊やだった二代目が継いでいる。

ラジオ局のコマーシャル調査では、2週間ほど3人が24時間交代でストップウォッチと格闘した。また、「ちびっ子ノド自慢」という当時人気のテレビ番組では、撮影車の夜警のアルバイトをしたが、人気番組を生で見ることが出来、また北九州一円を廻ることができた。「那珂川を下る」と言う番組のアルバイトでは、中洲をボートで下る時、川が随分臭かったのを覚えている。

また4年の間には私も、家庭教師や肉体労働などで、クラブ活動や交友費（飲み代他）を捻出した。最初の家庭教師は、料亭のお嬢さんで、好待遇に満足していた。が、女子大生で美人のお姉さんがいて、悪友達に唆されて遊びに誘い出したが最後、直ぐ首になった。

次は猛省して、印刷会社のご子息にした。アルバイト料は下がったが、真面目に勤めた結果、今度は卒業まで無事継続できた。

私は、子供の頃は体が弱くて、この子は長生きし



2012.5.16 卒40周年・九経43E11クラス会（東京支部） 神田・魚海船団宴別邸 向かって左から 西村君、橋本（寛）、久野君、深島君、橋本（純夫）君、藤田君、林君

ないと言われていたことから体を鍛えるべく小・中学は相撲や野球、高校は陸上部と運動に励んだので、肉体労働のアルバイトに抵抗は無かった。当時、築港に飯場があり、そこへ行くと仕事を斡旋してくれた。私は当時痩せてひ弱に見えた所為か、最初は建設現場の機材運びや清掃などの軽い仕事が廻ってきた。卒業する頃には、一輪車でセメント運搬もプロ並みに上達し、きつい仕事では日当が割り増しになった。飯場へ行き着けば、朝ご飯を食べさせてくれ、お昼の弁当も後払いで持たせてくれ、金欠時には実に有難いアルバイトだった。

それから、夏・冬休みには纏まったアルバイトが出来た。長崎本線複線化工事の鉄筋工事、九州縦貫道久留米インターチェンジの設計図の修正作業や現地測量の手伝いなどで、多少だが九州のインフラ整備にも貢献できた。

また、レストラン「ひすい」でボーイのアルバイトもした。中洲大通りを入れて直ぐの所の大きな店で、料理もスイーツも一流とあって、繁盛していた。夜11時を回ると中洲のお姉さんたちが客と同伴でやってきた。殆どが連れに気を遣ってか、ポークチャップを注文した。ポークチャップは、お値打ちでボリュームがあり、しかも美味しいと三拍子揃っている。中洲のお姉さん達は、実にいじらしかった。店のパティシエが、今中洲で流行っている歌だと「幸子」を歌ってくれた。私は忘れないよう、直ぐに採譜した。その歌は、かなり後になってからヒットしたが、余りに年月が経っていたので、採譜を確認すると全く同じ歌だったのに驚かされた。

次にクラブ活動についてだが、九大混声合唱団（九混）に入部した。最初の全体合宿で、教養部の指揮者を選ぶ選挙があり、私は無謀にも立候補して、教養部指揮者に選ばれた。

それからは音楽漬けの生活が続いた。定期公演会

では、オープニングに教養部指揮者が指揮するのが恒例で、何とか無事に勤める事ができた。自分では期待に応えようと一生懸命だったが、定期演奏会後の合宿で、教養部の仲間から練習がきつくて面白くないと、リコールされてしまった。後にフルトベングラの伝記を読んだら、指揮者に求められる能力は、10%の音楽的才能と90%のオーガナイザーとしての能力であるという旨の記述があり、もっと早く、そのことに気づくべきだったと後悔した。九混に大変な迷惑をかけてしまったことを、今でも申し訳なく思っている。それで九混を去った。

まもなく高校からの友人、平原君から労音合唱団に誘われ入団した。指揮者の吉永さんはロシア民謡に造詣の深い素晴らしい指揮者で、団員皆に慕われ信頼されていた。私は自分が指揮者として未熟であったことを改めて痛感した。練習の後は、皆でお茶や食事を楽しんだ。勿論ロシア料理で、寒い日のピロシキやロシア紅茶は実に美味しかった。

その後、九混の指揮をしている押本君が、社会人の合唱もやりたいとやってきた。彼は大変な勉強家で才能も兼ね備えていた。私が九混を退団した後、彼が九混の正指揮者で頑張っていることが判り、内心安堵した。これらの出来事は、苦い体験ではあったが、今では懐かしく、忘れ難い思い出だ。

会社生活についてはエピソードを一つだけ紹介したい。私の仕事は出張が多く、移動の合間に歌詞やメロディーを思い浮かべるのが楽しみで、それをメモしておいて作曲するのが、下手の横好きの趣味になった。故郷への想いを綴った一曲「浜の歌“夏”」で、この寄稿を締めくくりたい。震災で、故郷を遠く離れて暮らす人々にも、想いを重ねた。

1. 生まれたところは、浜でした
前は有明、雲が光る
干潟にきらりと釣り針走り、
潮の香むせる、夏でした
2. 育ったところは、浜でした
川面に揺れる、祭り提灯
兄と担いだ提灯竿が、
肩に重たい、夏でした
3. 別れたところは、浜でした
山へと向う、野辺送り
幼い妹は無邪気にはしゃぎ、
母を葬（おく）った、夏でした
生まれて育った浜だけど、

今では、遠くになりました
今では、遠くになりました

リレー随想

懐かしき田島寮の思い出



九電不動産(株) 常務取締役

中原 敏詔氏

1975(昭和50)年卒

1. まえがき

大学に入ったら寮生活してみたいと思っていた。とりわけ、旧制高校の寮生活に憧れていた。それは家庭の事情で上の学校に行けなかった父の憧れでもあった。自宅にあったレコードで「旧制高校寮歌集」を聴き、よく口ずさんだものだ。入学と同時に田島寮に申し込み、幸いに入寮することができた。

田島寮は六本松の教養部の南東方向にあり、歩いて5分の距離にあった。寮の敷地の入り口から建屋までの間に素敵なポプラ並木があった。韓国ドラマ「冬のソナタ」の有名なシーンに出てくるそんな並木であった。田島寮から樋井川の左岸（夏の季節に大きな花をつける芙蓉の花がとても美しかった）を

通り最初の橋を渡って梅光園団地を通り抜けると、まもなく学校に着いた。

寮生活ではコンパ等の飲み会で「田島寮寮歌」「田島寮逍遥歌」を幾度も歌った。全員、興が乗ってくると立ち上がりいつも1(アイン)2(ツバイ)3(ドライ)で九州大学田島寮寮歌となった。寮内で時には寮外で大声で歌い皆と青春を謳歌していた。古い木造2階建ての田島寮はA棟からF棟まで6棟あり、和室部屋と2段ベッドの洋室部屋とがあり何れも2人部屋であった。廊下の床には多くの先輩が恐らく下駄で歩いたからであろういくつもの傷があった。

田島寮に2年間、後半は松原寮に2年間、大学の4年間はすべて寮生活で過ごした。

2. 寮生活の魅力

前身为旧制福岡高校の寮であった田島寮(注記:旧制福岡時代の学寮は学内に設置されていた。その建物の一部が田島地区に移築されて新制九大の寮となったものである。)は、私が入寮した昭和46年当時、建物は既に相当に傷んでいた。が、よく言えば古風バンカラな弊衣破帽が似合うその建物と雰囲気は私はとて気に入っていた。おまけに寮は家賃が500円/月と安い、2日に1度風呂にも入れる。エッセン(食堂)の食事も60円~120円と安くて充実していた。当時珍しい全自動の洗濯機まであった。従って、これといった不自由も感じなかった。

当時1回生から2回生の前半で六本松教養部での授業は終わり、2回生の後半から各学部の箱崎へ授業が移った。それに併せて住家も箱崎に移すのが一般的であったが、私はそうはせずに半年は通学した。同様に田島寮を好きな者が私の周りには少なからずいた。とはいえ、田島寮は留年率が頗る高かった。5割どころではない留年率は入寮生にとってとてめにかかることであった。そうそう、寮は勉学の場にはとてめ不適であった。当時はまだ学生運動に熱心な者が留年して寮の主として居住していた。従って、入寮時は学生運動への勧誘もしつこくあった。部屋に来て明け方の3時、4時まで粘られ断るのに、苦労をした。

自分の部屋がマージャン部屋になってしまって困ったこともある。それを避けようと他室で徹夜麻雀をして自室に戻ると勝手に他のメンバーに占領され寝られないこともよくあった。夜遅く大きな音でギターを弾き歌を歌う。マージャン牌をかき混ぜる音が昼夜を問わず聞こえてくるまさに「不夜城」であった。

3. 寮の主なイベント

6月に行われる田島寮祭には市内の高校生、短大生、大学生など多くの来訪があった。模擬店等が出て多くの人で賑わった。寮祭の目玉は「樽神輿」だ。白い禪姿の寮生が「樽神輿」を担いで「わっしょい」、「わっしょい」と田島寮から六本松界隈を練り歩く、また走る。時に酒に酔って大声で騒ぎ中には酔いすぎて股間の大事なものが禪からはみ出したのに気がつかずにいる者もいた。

平成19年7月、田島寮の閉鎖とともに最後の「樽神輿」が天神から寮まで練り歩く姿が地元TVでも放映された。それを見て自分らの昭和46年頃にタイムスリップするとともに、ああこれで思い出の九大六本松の光景が消えてしまって、伊都の方に移ってしまうんだなと一抹のさみしさを覚えた。

入寮後に経験した夜半に起こされる「ストーム」も忘れられない行事である。深夜にストームの掛け声とともに多くの寮生が一箇所に集められ寮長の橋口さん(宮崎出身)の号令一下全員コップ酒を一気におおって「ウオー」と叫んで外に繰り出した。パンツに鉢巻姿そして裸足の寮生の大勢の集団が走る、走る、そして酔いもどンドン回る。集団の後ろには数人の人がリヤカーを引いて追走していた。これは、ケガをしたりして動けなくなった者を乗せるためのものだと聞いた。そんなことがあるのかなと思っていたら実際、溝に転げ込んでケガをして動けなくなり乗せられていた者がいたのだから驚きだ。走る集団のお目当ては近隣の中村短大の女子寮であった。

途中、別府橋を渡ったところにあった酒店の方から酒を振舞ってもらい更に意気が上がり元気全開。目的地の女子寮に着くと2階の窓から鈴なりになって多くの女子学生が「キャーキャー」と大声ではやしたてる。我々の中にはアルコールで元気を出しすぎて建物の中に乱入したつわものが何人かいた。当時は、そういったことを受け入れてくれる世の中であった。とはいえ、建物に乱入した一部のものが窓ガラスまで割ってしまう行き過ぎの行為となってしまった。それが後日、新聞に載ってしまい、学生さんやりすぎという話になってそれ以降、この「ストーム」は中止になってしまった。この伝統が絶えたことはとてめ残念であった。

4. 寮生活から得た多くの友

寮は情報が集まる場所であった。とりわけ役に立ったのが就職活動だった。皆が持ち寄る各企業の採用情報関係、先輩の来訪による所属企業の情報は

とても貴重であった。就職した先輩からの要請で企業の面接にも動員され、志望企業の面接対応に役立った。そのほか学科の試験の情報、アルバイト情報、種々の情報が、寮生間でまた寮に出入りをする多くの人から得られた。

3回生の直前3月に松原寮へ移った。同室者がなかなか現れない。4月からの授業開始直前に現れた人それが重岡和年氏(法)だ。同室者として、また我々が立ちあげた大学のサークル(後述)の知恵袋であり、L1-11のクラスを中心とした「健人会」のメンバーでもありその出会いから今日までの長い付き合いだ。

松原寮の寮祭でダンスパーティを主催した。チラシを作り近隣の女子大、短大、看護学校への勧誘のビラ配りを行った。思いのほか人が集まって興行的には大成功であった。しかし、ダンスパーティ終了とともに売り上げのお金を全部入れた箱をあれよあれよという間に寮委員に召し上げられた。それまで何らタッチをしなかったくせに、寮で催しをする場合の収入は寮の会計に入れるようになっている、などと言われそんなことを聞いていない我々と言いつ争いになった。そのことで、演奏のために来てもらった大学のバンドの人にお礼のお金を払えなくなりそうになった。かろうじて小額のお礼をすることで容赦願った苦い思い出だ。

松原寮、田島寮と二つの寮を通じて思い出すことがある。それは、寮外からの電話を館内放送で呼び出すときに男性からの電話であれば「〇〇さん電話です」、女性からの電話であれば「〇〇さんお電話です」と区別をしていたことだ。「お電話」の多い人は特定の人に限られていた。それで皆は△△君は女性にもてるんだなーと推測をし、また羨ましく思ったりしていた。一方、「お電話です」という呼び出しで喜んで走って行って慌てて電話を取ると母親だったりすることもままあった。呼び出した者がにんまりしてて癪に障ったものである。

寮にいるとアルバイト先探しにも事欠かなかった。家庭教師、築港の立ちんぼ、夜間の道路舗装、予備校の清掃など放送で案内があり有難かった。経験はないが築港の沖仲仕、中洲のバーテンダーなどいろんなバイトの案内があった。

休みの日の朝、徹夜マージャン後の寝入りばなを無理やり起こされることがある。合ハイのメンバーが足りないということで急遽動員された。寝不足の目をこすりながら舞鶴公園や香椎花園に出向いた。ああいう場で将来の伴侶を見つけた人もいるのかなと今も思う。

寮では多くの友人を得た。中野、重岡、中家、松田、平川(憲)、中村(健)、加藤ら。そして寮を介して中川、西嶋、中村(哲)、沖永、原田、中村(博)、湯田ほか。ともに学びともに遊んだ仲で今も付き合いが続いている。

5. L1-11の思い出

勉強のことも書かねばならない。L1-11の指導教官は川口武彦先生でとても面倒見がよかった(注記:川口先生については、本号所載の奥田八二「九大特別研究生の時代」にも詳述と写真があるので、参照下さい)。貝塚のご自宅にクラスの大勢で押しかけた。奥様、お嬢さんがすごいご馳走を出してくださいました。行った人は皆今でもそのときの様子を覚えていると思う。L1-11の仲間は学生運動がまだ盛んな時期でもあり、クラス討論会、ソフトボール大会への参加、合同ハイキング、何をやるにしても皆でよくまとまっていた。それは、卒業後も中家君が発起した「健人会」(その前は「賢人会」として今でも東京を中心として川波、遠藤、倉園、竹山氏も加わり親しい集まりが続いている。クラスでは富井、中楯、野瀬、箱崎、原岡、樋口、林、早田などの顔を思い出す。

大学3回生からは「経営財務論」の片山ゼミに所属した。戦時中、片山先生は潜水艦の艦長をしていて定かではないが戦犯にかかったとお聞きした。戦後大学に残り苦勞をされたはずだがそれを全く感じさせない明るい豪放磊落な方であった。片山ゼミは単位が取りやすいというのでそれ目当ての多くの学生が集まった。20人もいた多分最大のゼミであった。濱中、中山、藤村、須藤など多くの人と親しくなった。卒業後、片山先生の叙勲のお祝いを福岡に集まって藤村君を中心にやれたのはよき思い出だ。多くのゼミ仲間が著名企業に就職をした。

6. グリーンクラブの思い出

昭和48年2月に田島寮、L1-11同級生を中心にグリーンクラブを立ち上げた。九州の身近な山々、久住山、英彦山、福知山、宝満山などに月例登山、九重の合宿などとても活動的なサークルであったと思う。創設時の構想、主旨、起案は中野に負うところ大だ。設立時の主なメンバーは中野、重岡、西嶋、中村(哲)、松田、中尾そして私だ。グリーンクラブの中身は本りレー随想で古賀(英)氏や西嶋氏が詳しく書いている。後輩の真名子、都島(農)、古賀(英)、松本(工)、岡田、柴山(農)諸氏らがそれを継承し大きく育て今日に至っている。現在大学で最も部員の多いサークルとして続いているのはうれしき限りだ。

とはいえ、昨年5月連休中に登山のエキスパートであった古賀直人君（52年法卒）が立山連峰で遭難して亡くなったのはとても悲しい出来事であった。昨年8月にOB16名が箱崎の「六角堂」に集まって「偲ぶ会」を行った。現役諸氏にもこのようなことが二度と起こらないようくれぐれも気をつけてもらいたいと切に願っている。

7. その他の思い出

今回、寄稿にあたり学生時代の4年間のいろんなことを思い出した。ある夜、寮友の中家、平川（憲）、濱中等と西嶋の下宿を訪ねたことがある。途中ゴミ箱の上に包装をしたままで包み紐のあるお菓子「天草サブレ」が捨て置いてあった。裏を見ると1カ月前の賞味期限切れであった。「彼はお菓子が大好きだから喜ぶよ。持って行こう」。おいしそうに食べる彼が気の毒になった。我々も仕方なくそれを食べたが、皆のおなかは大丈夫であった。彼に本当のことは言えなかった。

合同ハイキングの幹事をしたときに先方の女性の一人から自分に会って是非話をしたいとの電話をもらったことがある。喜び勇んで出かけたら平川（旧姓中川、自分の前の「リレー随想」寄稿者）氏が全く振り向いてくれないので私に仲介をお願いしたいというのが目的であった。当時の平川は背が高くす



昭和49年11月グリーンクラブ九重登山4年生一同



寮友
後列 濱中、西嶋、中村（健）、平川（憲）
中列 中家
前列 中村（哲）、中野、中原

らっとした九大生らしからぬ見かけでよくもてた。いろんな懐かしいことが思い出される。

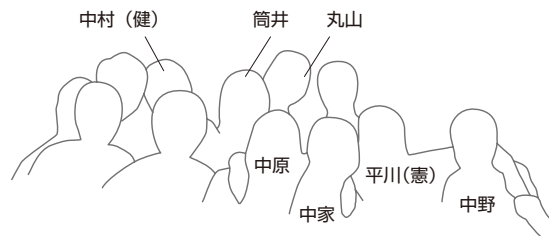
8. まとめ

学生時代多くの友人に出会った。その出会いのスタートは田島寮であったと思う。そこからクラスの仲間、そしてグリーンクラブの仲間と付き合いの輪が広がり今日まで続いている。皆からいろんなことを学んだ。また、今までの会社生活でスランプに陥ったとき仲間の言葉や励ましに随分助けてもらった。それは皆も同じであろう。

現在、九大は伊都キャンパスに移転している。六本松の旧校舎はすべて壊された。正門に立つと平坦になった土地の奥のほうに山の上のホテルが見渡せる。跡地には平成30年に福岡地裁、弁護士会館等が移転してくると聞いている。自分は電力会社に入りその後関連会社に移った。ずっと九州にいたこともあり時々、六本松を通った。今、そこに建物が無いことにとてものがっかりしている。しかし六本松にはじまり伊都での11月の大学祭には松本（53年工卒）、重岡、古賀（英）、内田（H10年工卒）氏らとほぼ毎年出かけている。そこでは平成生まれのサークルの後輩諸氏と交流を図っている。大学の場所は変わり、年齢も大きく離れた彼ら、初めて出会う彼らと共通の山の話等でいつも盛り上がる。年末の30日には卒業後ずっと福岡でOB会を開催している。中野氏は遠方にもかかわらず毎年関西から駆けつけてくれる。九大の田島寮に始まった学生生活が今でもそんな出会いと交流を作ってもらっていることに心から感謝したい。



樽みこし出発前（市民会館前～九大田島寮）



九州大学経済学部同窓会略年表⑬ (2013(平成25)年) (九大広報・経済学部同窓会報より抜粋)

日付	九州大学及び経済学部の動き	同窓会の動き
12月14日		福岡支部主催忘年会 (益正天神本店)
1月11日		福岡支部主催新年会 (九経連会議室)
1月18日		東京支部若手理事会
1月30日		九大東京同窓会主催総会・新年賀詞交歓会 (東京・学士会館)
2月16日		第38回関西支部総会 (大阪・弥生会館)
2月20日		東京支部理事会 (九大東京オフィス)
3月5日		福岡支部主催講演会 講演会：江崎哲郎氏 (九経連会議室)
3月26日	学位記授与式	平成24年度同窓会主催卒業記念祝賀会 (福岡リーセントホテル)
3月31日	久原正治、関源太郎、時永祥三、中村裕昭、角ヶ谷典幸各教授退官	
4月6日	第17回経済学部名誉教授の会 (福岡リーセントホテル)	
4月9日	入学式 (福岡国際センター)	
4月13日		東京支部主催新卒者歓迎会 (TKP有楽町ビジネスセンター)
4月24日		福岡支部評議員会 (九経連会議室)
5月10日		福岡支部総会実行委員会 (電気ビル共創館エスペランサ)
5月15日		同窓会報第54号発行 (32P)
5月18日		関西支部主催見学会 (池田町めぐり) と懇親会 (かごの屋)
5月28日		福岡支部運営委員会 (九経連会議室)
6月2日		福岡支部主催第54回交流ゴルフ会 (北山カントリー倶楽部)
6月7日		平成25年度福岡支部総会 (ハイアットリージェンシー福岡)
6月19日	第13回九大・北大合同フロンティア・セミナー (東京・ステーションコンファレンス)	
7月5日		平成25年度東京支部総会 (東京・学士会館)
7月8日		福岡支部主催アサヒビール博多工場見学・アサヒビール園交流会
8月31日		九大東京同窓会主催Summer Festa (東京・青山ダイヤモンドホール)
9月21日		関西支部主催ゴルフコンペ (愛宕原ゴルフ倶楽部)
11月8日		広島地区九大法・経同窓会総会 (メルパルク広島)
11月21日	第14回九大・北大合同フロンティア・セミナー (東京・ステーションコンファレンス)	
11月15日		同窓会報第55号発行 (32P)
11月16日		関西支部主催勉強会 講師：恋塚晴三氏 (ハートンホテル)
11月22日		東京支部若手理事会 (龍潭 東京駅店)
11月30日		福岡支部主催第55回交流ゴルフ会 (筑紫丘ゴルフクラブ)
12月6日		福岡支部主催忘年会 (福岡市・剛呑)

経済学部同窓会会則

(名称)

第1条 本会は九州大学経済学部同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 講演会、懇親会の開催
- (2) 卒業生名簿の発行
- (3) 会報の発行
- (4) その他本会の目的を達成するために必要な事業

(本部並びに支部等)

第4条 本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市東区箱崎6-19-1）に置く。

本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。

(構成)

第5条 本会は次の者を以って構成する。

- (1) 九州帝国大学法文学部経済科卒業生
- (2) 九州大学経済学部卒業生
- (3) 九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者
- (4) 九州大学経済学部および大学院経済学学府在校生
- (5) 九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員
- (6) 上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者

(役員)

第6条 本会は次の役員を置く。

理事25名以内、評議員各卒業年度最低1名、監事2名、顧問若干名

- 2 理事のうちから会長を1人、副会長を若干名選任する。
- 3 役員の内任期は3年とする。ただし、重任を妨げない。
- 4 (1) 会長は本会を代表し、会務を総理する。
(2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
(3) 理事については別に規定する。
(4) 評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか、必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。
(5) 監事は本会の会計を監査する。
(6) 顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお、会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。

(理事ならびに理事会)

第7条 理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。

- 2 会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。
- 3 理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

(総会)

第8条 本会は毎年1回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めるときは、臨時総会を開くことができる。

- 2 通常総会では次の事項を承認する。
 - (1) 予算および決算に関する事項
 - (2) 役員を選任、会則の制定および変更に関する事項
 - (3) その他本会の運営に関する事項
- 3 総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

(運営)

第9条 本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(個人情報の保護)

第11条 本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守する。

- 2 本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとする。

※会費規定

1. 会費は1人年額1,500円とする。
2. 会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。
3. 必要に応じて臨時経費を徴収することができる。
4. 会費規定は理事会の議により変更することができる。

※会費規定細則

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）に区分する。

終身会費は一括払いまたは3分割または6分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は3年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。

なお、第5条の(4)について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一括	45,000円
②	3分割	15,000円×3回（1.5年間で納入完了）
③	6分割	7,500円×6回（3年間で納入完了）
④普通会費	3年毎に	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

附 則

本会則は、平成8年10月11日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成18年2月10日に改定され、同日より施行する。

九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)
- 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)
- 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)
- 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)
- 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)
- 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)
- 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)
- 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)
- 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)
- 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費(45,000円)と普通会費(3年間分4,500円)になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- | | | |
|-------|------|-----------------------------|
| ①終身会費 | 一括 | 45,000円 |
| ② | 3分割 | 15,000円×3回(1.5年間で納入完了) |
| ③ | 6分割 | 7,500円×6回(3年間で納入完了) |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ(11回・49,500円の納入で完了) |

◎平成18年(2006年)3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、平成26年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更がありましたら、同窓会事務局までお知らせ下さい。

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。

適当なものがございましたら事務局までご連絡下さい。